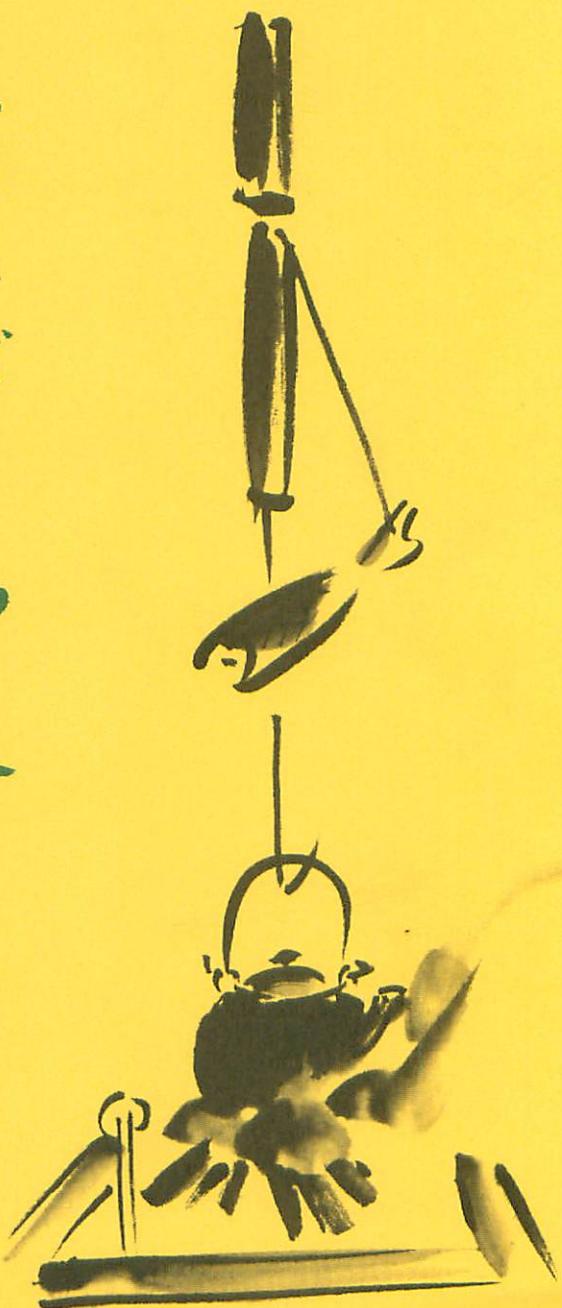


レオ・スタインバツク神父の
宣教夜話



レオ・スタイルンバウツ 神文の

道 教 衣 話

どあいさつ

スタンバック神父様が御帰天下さいまして早や一周忌
を迎える頃となりました。

神父様は終戦直後、日本人への救靈の熱意に燃え
貨物船の底に乗つて来日され、以来四十三年の長きに
あたつて、心身を投げうち、京都教区においてお働き
下さいました。その間、どれほど多くの人々が靈肉ともに
救われたか知れません。我が家も神父様に大変お世話を
になり、両親は洗礼のお恵みをいただき、安らかに帰
天させていただきました。

このたび神父様の一周年にあたり、神父様への感謝
の一端として、又、両親の供養の為、クレオ・スタンバック

(2)

神文の信仰夜話^クを出版させていただきました。この
本は神文様がご自分の宣教を回顧してお話になつた
ことを妹がそのまま、書きとめたものでござります。

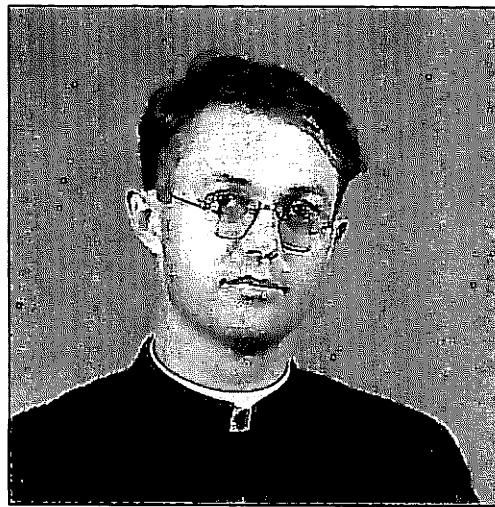
神文様とかかわられた方々にお贈りし、神文様を
偲ぶよすがにてていただけまーたら、亡き両親もござ
喜ぶことと存じます。

神文様のご冥福を祈りつゝご挨拶とさせて頂きます。

合掌

一九九五年十月七日

京都市北区紫野大徳寺町十番地
野 村 寿 美 子



末日当時の神父様

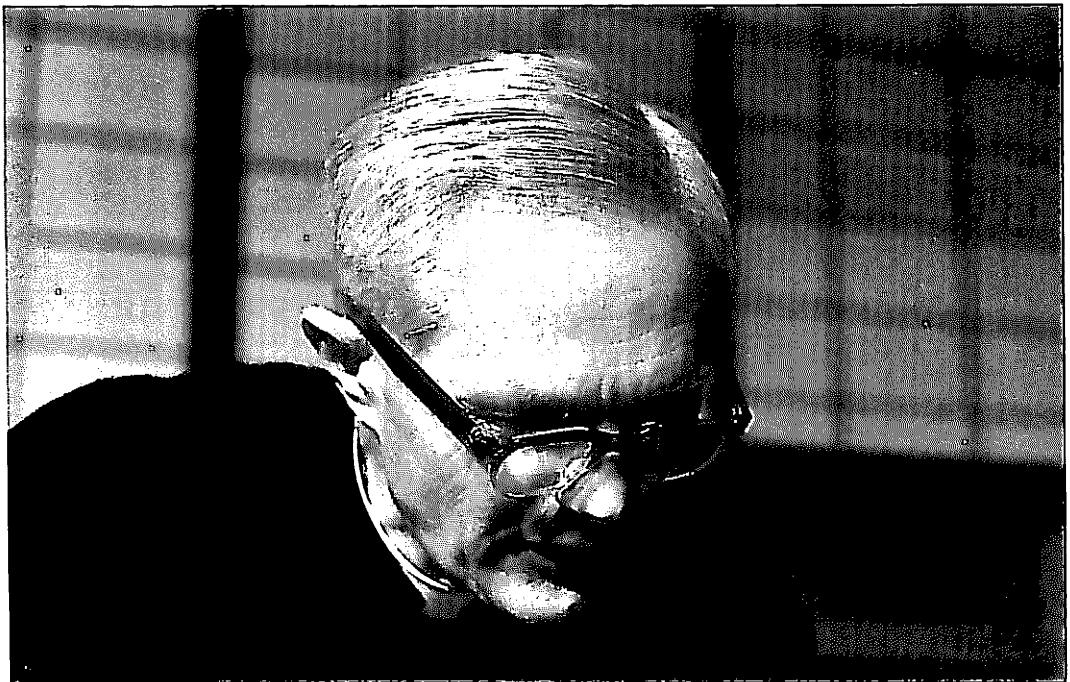


川西村の高田村長さんと



1952年病気で帰国される前（青谷教会）

God bless you forever
R. Stenback



(三重県) 松阪カトリック教会の聖室で (昭和40年)



(昭和46年) 三重カトリック児童園の祝別式に障害児から花束をもらう
(11月1日)



自作の聖劇“復活”を神の園の脇員と共に演じ主役の
イエスさまにみうれむ神父様(73才)

(1978.3.29)



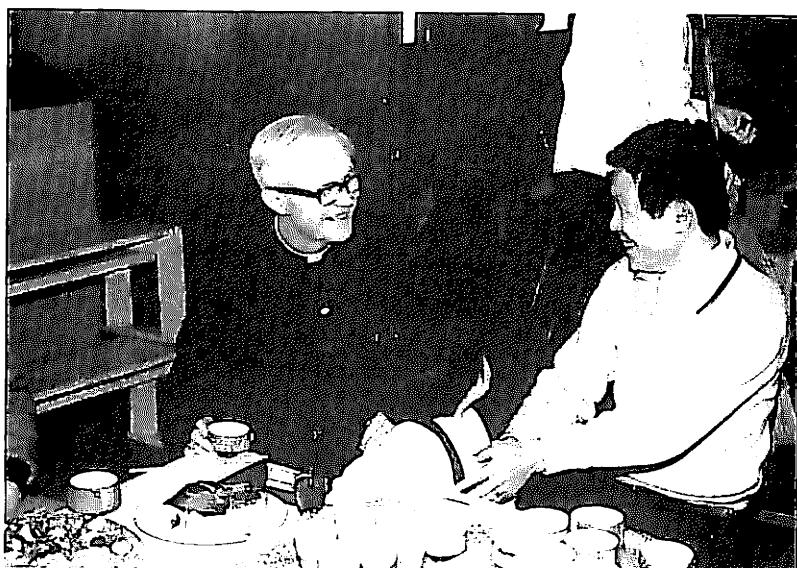
エマオの宿で"パンを祝された時



↑イエスのお姿は見えなくなつた。



神の國の聖堂で老人に洗礼を受けられる神父様



精華教会で初聖体日の神父様（1977年）



京都河原町司教座聖堂で金祝のミサ (1981.5.17)

田中司教様 スタインバッハ神父様 マキロップ神父様



金祝ミサを終えて退場されるところ (1981.5.17)



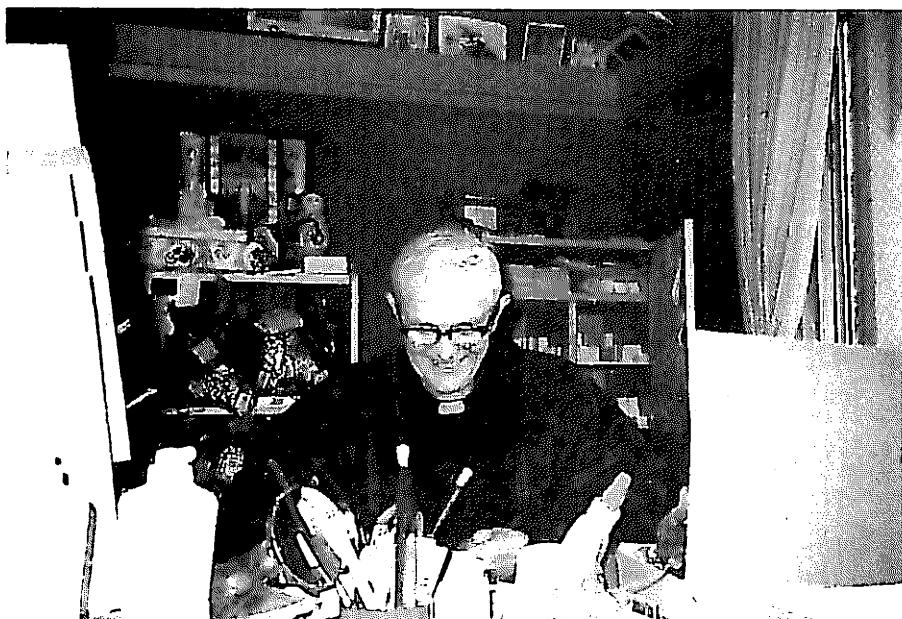
(1981.5.17) ハーハー様から賞状をいただきて喜びの神父様
田中司教様 マキロッフ神父様



唐崎メリノールハウスでの金祝のパーティ (1981.8)
古屋司教様 田中司教様



神の園玄関前でボランティアの人たちと



神の園で“みどりのスカブラリオ”をつくられる神父様

目 次

(11) 目 次

| | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|----|-------|-----|-------------------|----|----|----|----|-----|----|----|----|
| どあいきつ | …… | 野村寿美子 | (1) | 不思議のメタイ（その一） | …… | | | | | | | |
| ありし日のスタイルバック神父の面影 | …… | | | 恵まれた姉弟 | …… | | | | | | | |
| 私の初めての洗礼 | …… | | | 約束（その一） | …… | | | | | | | |
| 腹切りのおじいさん | …… | | | 約束（その二） | …… | | | | | | | |
| 狼退治 | …… | | | きき入れられた祈り（その一） | …… | | | | | | | |
| 寄附のお米 | …… | | | きき入れられた祈り（その二） | …… | | | | | | | |
| 信頼（その一） | …… | | | 九日祈祷 | …… | | | | | | | |
| 司教様のお話 | …… | | | 子供の祈り | …… | | | | | | | |
| 断つた縁談 | …… | | | 日曜日を守ることについて（その一） | …… | | | | | | | |
| 神様の為の仕事 | …… | | | 日曜日を守ることについて（その二） | …… | | | | | | | |
| 天国へ行つた人の祈り | …… | | | 日曜日を守ることについて（その三） | …… | | | | | | | |
| 23 | 21 | 19 | 16 | 11 | 8 | 6 | 3 | 1 | (3) | 33 | 30 | 27 |
| みどりのスカブラリオ | …… | | | | | | | | | | | |
| 59 | 56 | 54 | 53 | 51 | 49 | 47 | 43 | 37 | | | | 25 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----------|---------------|
| 三条教会時代の布教活動 | 62 | 寄附の魚 | | | | | | | | | | | | |
| 宇多野療養所のじさん | 69 | 青果会社の社長さん | | | | | | | | | | | | |
| 罪の償い | | | | | | | | | | | | | | |
| 稻村の魚 | | | | | | | | | | | | | | |
| 周山方面の布教 | | | | | | | | | | | | | | |
| 幸いな故障のわけ | | | | | | | | | | | | | | |
| 福井の大震災 | | | | | | | | | | | | | | |
| 陶器の寄附 | | | | | | | | | | | | | | |
| 炭の寄附 | | | | | | | | | | | | | | |
| 大阪のお手伝い | | | | | | | | | | | | | | |
| 自転車泥棒 | | | | | | | | | | | | | | |
| 信頼(その二) | | | | | | | | | | | | | | |
| 不思議なお魚代 | | | | | | | | | | | | | | |
| 95 | 93 | 91 | 89 | 88 | 87 | 82 | 80 | 75 | 71 | 70 | 69 | 62 | 寄附の魚 | |
| 95 | 93 | 91 | 89 | 88 | 87 | 82 | 80 | 75 | 71 | 70 | 69 | 62 | 青果会社の社長さん | |
| | | | | | | | | | | | | | | くさ頭の子供 |
| | | | | | | | | | | | | | | かずか君の建てた障害児施設 |
| | | | | | | | | | | | | | | 老夫婦とスカブライオ |
| | | | | | | | | | | | | | | 貪しい母の信仰 |
| | | | | | | | | | | | | | | ほゝえみ |
| | | | | | | | | | | | | | | 松阪教会の設立 |
| | | | | | | | | | | | | | | 鉄道事故 |
| | | | | | | | | | | | | | | 葬式などの老人 |
| | | | | | | | | | | | | | | 洗礼を受けた住職 |
| | | | | | | | | | | | | | | 施について |
| 138 | 134 | 131 | 129 | 125 | 122 | 119 | 115 | 108 | 106 | 103 | 101 | 99 | | |

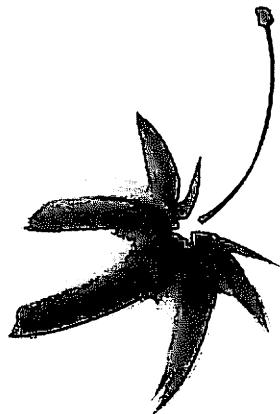
(13) 目 次

| | | | | | | | | | | | |
|------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| お爺さんと菊 | | | | | | | | | | | |
| 聖母から教わった敷地 | | | | | | | | | | | |
| 墮胎しないで | | | | | | | | | | | |
| 朗らかになつた娘 | | | | | | | | | | | |
| おがみやさん | | | | | | | | | | | |
| 聖母の注射 | | | | | | | | | | | |
| 家出娘 | | | | | | | | | | | |
| 音楽会 | | | | | | | | | | | |
| 約束（その三） | | | | | | | | | | | |
| 間違えた部屋 | | | | | | | | | | | |
| 街頭募金 | | | | | | | | | | | |
| 失くなつた財布 | | | | | | | | | | | |
| 神の園を建てるまで | | | | | | | | | | | |

189 180 175 172 169 167 163 160 155 153 149 145 141

田辺病院のこと
泥棒災難
東條伍長
レオ・スタイン・ハウ神父略歴
あとがき

199 198 192 189 186





私の初めての洗礼

昭和六年二月一日に私は叙階の被跡を受け神父となりました。ところが私の兄の一人の子供が二週間程前に生まれました。教会の規定に従つて、生まれてから三日以内に洗礼を受けさせねばなりません。私の兄弟は皆三日以内に洗礼を受けさせられました。しかし私の兄はどうしても私に洗礼を授けてもらいたかったので、その村の神父と相談し、神父の許しを得て二週間洗礼を延ばしました。私はようやく故郷に帰り、すぐに洗礼を受けましたが洗礼の時、不思議な事がありました。

洗礼の儀式の中に、先ず悪魔祓いの祈りを神父が唱えますが、私はその祈りを唱えると不思議にも、祭壇の上に置いてあつた金属のローソク台が爆発しました。ローソクはとも一つありませんでした。しかしそのローソク台が爆発し、大きな音がして、祭壇はきたないもので大変よじれてしましました。後でいくら洗フ

1 私の初めての洗礼

ても落ちませんでした。一般の人ほどどういう事があったか想像がつきませんでしたが、私にはわかつていました。その子供に悪魔がついていたのです。その子供は生まれた時から、なかなか落ちつきませんでした。ずっと泣いたりしていました。何番目の子供が記憶していませんが、その子の母親は不思議に思い、心配でたまりませんでした。子供は落ちつかず泣いて、医者にみてもらつてもわかりません。どうも悪いところはなく泣く苦がありますのに。

しかし洗礼を受けたからはすっかり治つて泣かなくなりました。その子は今は大きくなりて健康体です。

やはり度々病人の病気の原因は、悪魔から来ると私は思っています。

腹切りのおじいさん

私は一九三一年に、初めて朝鮮に行き、三ヶ月に病氣で一年程、米國に帰りましたが、その頃のことです。

ロサンゼルスの一番大きな病院に、Yちゃんとゾーベン七十才以上の日本人のおじいさんが入院していました。私は東洋人係の神父でしたから、すぐに見舞に行きましたが、部屋に入ったラーヤさんはお話を出来ません。手もベットにつなげてあります。係のお医者さんにきいてみたら、Yさんは自殺未遂者でした。

Yさんは漁師で、三人の息子がありましたか、三人共、日本の軍隊に入つて、中国に行つてきました。Yさんは長年間漁師の仕事をし、友人もあまりいないうし、親戚もなく、年をとって淋しかつたので、自殺しかけたわけです。

ナイフを自分の腹に三回つき刺し、切腹しようとしたが、すぐに死ねないで、こゝでは首を切りましたが、喉の骨に当つたので死にませんでした。

安リ旅館にいましたが、隣の人を見つけて連絡し、病院に運びました。

私が病院に行った時、おじりさんは意識はありましたが、大変苦しみでいました。自分の手が縛ってあつたので、それを解いてもらいたかったのです。しかし話は出来ません。それで一枚の紙に、なわをとつてもらいたい」と、かなで書りてありました。係の医者さんは日本語を知らなかったので、私はおれを読んで伝えました。私がお医者さんは、「おれをとつたら、おじりさんは又自殺するからとうない」と言いました。そこで私は、よやく神様のお話をしたら、よくわかりました。

そして「私は自殺しようとしたことは、悪いといふことがよくわかつた。もう自殺しないから繩をとつてほしい」と言いましたから、そのことをお医者さんに言うと、「あなたが保証するなら繩をとります。」と言われました。私は、「私はおじいさんを信じています。もう自殺しないと思う」と答えました。そして私はおじいさんに言いました。「私はあなたの責任者だから、自殺するところだ」と言うとおじりさんは、「決して自殺しません」と言いました。私は又、少しイエス様の

お話を聞いて、そり日に洗礼を受けました。

おじいさんは間もなく回復しました。お腹の傷も、喉の傷も治りました。その後ロサンゼルスの老人ホームに移りましたが、おじいさんは大変喜んでいました。時々お腹の傷を開けて見せたり、私を揉んだりして、「私は恥ずかしく思い」「私は神様であります。私を揉んだら気持が悪い」と言うと、「あなたは神様ではありませんが、神様があなたにつりいる。あなたは、私の靈魂も肉体も救つてくれた。いつもあなたに手を合わせる時、あなたの中に神様が住んでいるから手を合わせるのです。」と言いました。本当に神様に感謝していました。

一九三九年八月に私は病気が治り、又朝鮮に帰りましたが、帰る前、私は老人ホームに行き、日本への老人達にお別れしたら、ユダヤ人は泣いて泣いて仕方がありませんでした。その日も又ユダヤを聞き、「これを見て下さい。あなたは私を救つて下さった。」と言いました。戦争中、おじいさんは収容所で亡くなりました。私は、そのおじいさんのこと、忘れられません。本当にありがとうございました。

狼退治

これは私の母の生れた所の話です。牛田舎でしたか、一匹のたちの悪い狼がおりました。方々まわる羊とか豚、鶏など殺して食へたらしいのに、この狼は殺すのが好きですから、一晩に二十匹も羊を殺したことがありました。その為に、そり附近の百姓たちは、日曜の朝早くから、狼を包围攻撃捕獲しようとしました。勿論人數が多くなければあまり成功する見込みはありません。しかし日曜日の事ですから、カトリック信者はミサにあすからねばなりません。一人の方は信者で、その仕事を断りました。「私は行きたいことは山々ですが、ミサにあすかる義務があるのです、私はどうしても教会に行かねばなりません。」と言つて、ミサに行きました。

他の人々は、朝早くから鉄砲とかつりで狼退治に出かけ、方々歩きまわりました。ちょうど昼頃のことでした。ミサに行つた方は、自分の家に帰つて来

て食事をしてから、一寸窓の外を見ると、例のたちの悪い狼が自分の庭に坐っています。もう大分走って疲れていたようでした。それで、「今日は台所の窓を少し開き、鉄砲を出して一発でその狼を殺してしまいました。

夕方になつて他の百姓さんたちは、とぼとぼ歩いて、大へん疲れてこの家の前を通りましたので、狼を撃ち殺した百姓さんは、「今日はどうでーたか?」ときいたら皆がつかりして、「ななかく見つかりました」と答えました。「そうですか、一寸私の家のポーチに来て下さい」と言って、ポーチに案内して、その死んでる狼の死骸を見せたのです。

やはり神様に従えばいつも成功します。

私は一やん、戦争中カリフォルニヤの日本人の収容所の中で、この話をした事がありますが、ちょうどこの日、沢山な子供が騒いでおりて話しつぶつしていました。しかし、この狼の話をしたらとても静かになりました。

寄附のお米

私が日本に来る前の話です。戦争が終った時、メリノールの本部から手紙をりたとき、私とハント神父さんとフェルセッカー神父さんの三人でニヤルトルと羊港に行き、貨物船に乗って日本に行くように命ぜられました。その途中ロサンゼルスに寄り、二、三日間メリノールの家に厄介になりました。

お昼すう二日ぐら前、ちょうど昼食している時に、玄関のベルが鳴りました。

私と四、五人の修道士と、神父一、二人いましたが、ベルが鳴つても誰もドアの方に行きません。私が「表に誰かが来て」と言つても、一人の修道士は「あれはうるさい乞食で泥棒です。一人は自動車のタイヤを盗もうと一まつた。ほつておひなりよのです」と言いました。すると又ベルが鳴りました。私は「もし貧しい人が来て何もあげなかつたら、氣持が悪い」と思つて、お金をもつて玄関に行き、ドアを開けると一人の婦人が立つてきました。「一寸相談したいことがあります

「とのこと、私は応接間に入れ、一人の年寄の神父を呼んでその方と話しました。

その婦人は、「日本の貧しい方に何か寄附したいが、どういうふうに送つたらよいのか」とききました。もう一人の神父は、「あなたは一度よりところに来ました。

この神父は明後日、必ず日本に行きますが、この神父は信用あるからはずとのお金を救済の為に使います」と言いました。それからその婦人は帰りました。

二、三日して私が出発してから、その神父に何千ドルもの小切手が送つて来ました。その神父はそつが金で二、三回お米を買って日本に送つてくれました。

初めは六十六石のお米が送つて来ました。その時米国の大軍が無料で送つて下さいました。日本に入ることも特別な許可が必要しましたが、マッカーサー元帥はすぐに許して下さいました。そつお米をすぐに配つたら又同じ位のお米が送つて来て、二、三回そつお金で送つたときました。

私はその恩人の方の住所をきりて礼状を出しましたが、「そんな人はいません」とソラテ手紙がもどつて来ました。名前と住所がはっきり書りてあったのに。

その住所は、鶴通り、でしが、後で考えたうあの方は天使だつたと思ひます。そのお米と配つたら一般の人が大へん感心し、日本へ篤志の方が「私はこの仕事に協力をしてほしい」と申込みがありました。

滋賀県の〇さんと、神主さんで、この神主さんは新聞を読み、沢山の白米を貰い、沢山の人々にあげていることを知つて、わざく見に来ました。私があげているを見、お金も貰わないを見て感心し、「私もこの仕事に協力したい、私の村に来てほしい」とおしゃつたりで、私と、私の手伝をするNさんと一緒に乗り、〇さんのお宮に行きました。〇さんはジープに乗り、滋賀新聞社に行きました。滋賀新聞の社長さんはお坊さんでしたが、その方も私共のジープに乗り、神主と坊さんと神文は、滋賀県の各役場をまわりました。〇さんが話したので、どこでも私共に寄附することを約束しました。その後は非常に楽でした。そのお米のおかげでした。

信頼（その一）

11 頼 賴 (その一)

北朝鮮にいた時、老人ホームのような仕事をしていました。私の住んでる家は平屋ヒラヤでしたが、私には少し広すぎました。冬の真最中は毎日のように、道に倒れ死ぬ人がいました。私は少しへ人の手伝いをしたいと思って、家の半分をそろそろ可哀そ
うな人の為に準備しました。ある冬に、その家に七十人ほど入っていました。主に足
り立てない人とか、目が見えない人、或は病気で立てない人とか、不幸な人ばかりでした。
別な所にも家があり、そこにも二十人入れていました。冬の間寝る所がないので、布
団を準備して。食糧品としては、粟と大豆とキムチ（朝鮮漬）でした。キム
チは秋に私共の方で造りました。樽にいくつも造り土に埋めました。そこには方
皆男の人で、その中には片足しかない人が、喜んで貰まわいの仕事をしてくれました。
もう一人の人も手伝い、二人でやっていました。これは日本人相手の教会でしたが、私は
その時韓国語を知らないので、教理を教えること出来ないので、あらうの伝道士

に来ていただき、週に一・二回ぐらい教理を教えていただきました。この二十人の方を養う為、お金は全然もういませんでした。私がもつていろお金は非常に少ないでしたが。

ある日、モリス教区長が私の教会に一晩泊りました。次の朝ミサを捧げました
が、私はその二十人の方を見せました。教区長は感心し、「この大勢の人を養う
お金はどこから来るのですか?」と聞かれました。私は、「神様から頂いていま
す」と言いました。しかし月末まで食糧品を買うお金はありませんでした。

「神様の御名によつて、この方々を迎えていますから。もしイエス様の御名によつて
私に食べさせてくれと言つたら、あなたも食べさせてしよう。こういう食い人を養
うのと、イエス様を養うのとは全く同じですから、私は全然心配しません。」と言
つてから、「月末までお金が足りないのに……」この教区長は寛大な方だから、お願
いしたら「トドクでしよう」と言いましたが、もう言つてしまつたので黙つてしました。

食事してから教区長は聴きそつていましたが、そんへ郵便屋が来ました。ちよ

13 信 賴 (その一)

うど教区長が沢山な石鹼を額につけ、カミソリですろうとしたら、私宛の書留が
来ました。開いてみるとお金が入っていました。月末まで十分なお金でした。私はそ
のお金と下さった方は、一度も顔を見たことも、手紙をもらつたことも無い人でした。
私は早速教区長にお金を見せ、「五分前まで、私があなたに話した時まで、お金は
ありませんでしたが今はあります」と言いました。教区長は「あなたは確かに神様
のお仕事をしていらっしゃる続けて下さい。お金が足りなかつたら喜んであげます。いつでも
言って下さい」と言われましたが、一度も頼みませんでした。

私は叙階式の時、招待状を出しましたが、それを印刷した所はニューヨークでした。
その招待状をメリノールの神学校に運ぶ時、私の招待状の包が、ニューヨークの地下や
かな路に落ちました。一人の人がそれを見つけ、私の住所が招待状に書かれていたので、
その方は早速その包を私に送つて下さいました。勿論、私はその方に礼状を出しま
したが、その後は全然便りがありませんでした。ちょうどその朝、その方から手紙を頂きました。

十分なお金が入っていたのです。その後は一度も便りがありませんでしたが、神様がその方の名前を利用さうつかもしれません。

その後私はお金のことにつりとは絶対心配しなりで、貪しい方を見つけたら施しました。聖書にちやどと書ります。『イエスの御名によつて物を施した事は、それはイエス御自身に施したことである』と。イエス様は金持です。全能な方ですから。

今この国の人はお金につゞき大変心配しています。自分の生んだ子まで育てるお金がないと言つて、それを生きものにしています。子供は神様の子だから、神様は十分養うが金を下さるのに、信仰者だったりいつも安心しています。

モリス教区長はまだ生きておられます。メリノールの本部にて、ずっと長年間私にお金を下さっています。ある日、その神父と一緒に平壌の駅に行つたら、時間がギリギリでーたがその時、一人の可哀そな人が神父に何か施して下さいと言いました。神父は時間がないのに老人の話を聞こうと施しました。私は本当に教えられ、感

心しました。

ハント神父さんも絶対断らない人でした。私はハント神父さんと平壤で十年一緒に働いたが、ある日、二人の十才か十三才位の朝鮮の子供が煙のまねをして玄関に来ました。私は大きい声で「チヨンスギー（まかわりの名）幸町の文番所に行って、一人の巡回をつれて来て下さい」と言いました。チヨンスギーはいいことはわかつて、が、その二人の子供に向こえるように言いましたが、その二人は急いで逃げました。その話をハント神父さんにしたら、神父さんはがっかりして、「しかし、その子供は可哀さうだから、大人な事をしてほしくません。その子も食べても権利があります」と言わされました。私はその言葉を忘れることができません。

普通の人々に上げることは誰れでも出来ます。しかし向こうが悪い人間だのに、その人に上げる者は本当に神様を信する人しか出来ません。そういう人には沢山なものを持ち上げる必要はないが、少しの食べられる位のものを施したらよいと思します。

司教様のお話

朝鮮の平壤にいた時、ブルトン司教様の黙想会にあづかりましたが、その黙想会のお話は、今日に至るまで覚えています。

一つは、「新しい住地に行つたら、前任の神父のきめた事をあまり変えないで、例えばミサの時間を急に変えたりすると、そこへ信者達は必ず文句が出る。習慣となつてしまし、又前の神父も覚えて親しくしていふから。二ヶ月間程、何も変えず、もし大変都合が悪いことがあれば、少しずつ變えるようだ」と言われました。

もう一つは説教の原稿のことでした。「初めてよその国に行つて説教することはないが、ひつりしいが、説教を自分で書いて、それから日本人に文法の悪い所だけ直していただき、それからそれを暗誦しておき下さい。絶対、原稿を使わないよう、原稿を読んではいけません。」と言われました。私は、その時までは説教

を書いて、勿論はじめは原稿を見ましたが、ブルトン司教様と、フロジヤク神父様の会話を聞いてからは、やはりその通りでなければと思つて、その通りにしました。

年をとつてから文法を正しく話さなければならぬから、とのことでした。

ブルトン司教様は、「一回火事に会つた時、沢山いい原稿があつたが、自分の原稿と皆焼かれてしまった。いつも自分の原稿を安全なところに入れておくように。原稿は一番の宝だ。」とおっしゃいました。

又「原稿を書いて十八年間位説教したら、原稿を書かないで説教が来るでしょう。自分の国の言葉だったら一年位で出来るでしょうが、十八年位かかる」とおっしゃいました。私は経験ある司教様の会話を聞いて、私も相当長く東洋で御厄介になりたいと思う、との通りにしました。

又、平壤の日本人相手の私の教会で説教された時、説教の前に、「こここの教会の信者は、私は知りませんが、どんな話をしたらよいか」と私の意見を聞きました。例えは、「サムライに来ないか?」があるか、遅れるか、など欠点を聞かれ、「私はよそから

来た者だから話し易い。あなたが話せば感情を害するおそれがあるから」とおっしゃつて、とてもよい方話をとして下さいました。

又、「日本人の神父の話は、場合によつては言葉は美しいかもしないが肉がない。とにかく、外国語で自分の考えを訴えらるなら、先ず自分の考えをきめて、それから言葉をやがす。自分の言葉は、きれいな言葉でないかもしだれないが、自分の目的を先ずきめて、それから目的を他人に移す道具をやがしなさい。言葉は第二です。あるいは、出来たけりきれいな言葉で話したいが、しかしその考えはあまり役に立たない。外国の人は話は下手かもしれないが、その話には力がある。だから失望しないで自分の考え方下手な日本語で書き、それを日本人に直してもらひ、それを暗誦したり、だんく正しく話せるようになるでしょうね」とおっしゃいました。

断つた縁談

これは米国であった事ですが、一人の娘が洗礼を受けました。そのお父さんとお母さんは信者ではありませんが、娘の結婚の相手に歯医者を見つけていた。その歯医者は信者ではありませんが、教会の規定によって教会で式を行ふもよいと言いました。その為にはどうしても、二、三回神父の話を聽かねばなりません。私は一度その方に信仰上の話をしましたら、その先生は信者の娘に、「もしもあなたが信仰を捨てたら私は結婚する。しかし信者であつたら私は結婚したくない」と言いました。娘の親は信仰を捨てた方がよいと思いました。歯医者は立派な人で、娘の為に長年より配偶者をさがしていましたから。娘が結婚しなかつたら親は大変怒り、問題になりました。

私はその娘に、「頑張り下さい。あなたが神様に従つたら、神様は良いようにして下さいます。あなたの親はあからざいのだから、頑張り下さい」と

励ました。親は怒りました。

一ヶ月からその歯医者は別の娘と結婚しました。ところが不思議なことにその歯医者は急に死にました。その時その娘の親は、「歯医者と結婚せずによかつた」と言って感謝しました。歯医者は新しい妻は妊娠していました。もし娘があの歯医者と結婚して、と歯医者が死んだ時、その娘の親は感謝しました。その後その娘は別な人と結婚しました。

私は青谷教会にいた時、病気になり米国に帰りましたが、よくなつてロサンゼルス教会に行きました。私は娘を忘れていましたが、娘は私に、「神父さん、私はあなたに従つてよかったです。より主人を見つけ、元気な子供を生みましたが、本当に神様に従つてよかつた」と言いました。その子供たちは皆信者になりました。

神様の為の仕事

私は戦争中、日本人の收容所で働いていた時、ローンパイン（一本松）という村に住んでいました。その村から收容所まで、自動車で二十分で行けました。

砂漠で、道は舗装していません。朝六時に必ず行き、夜おそくまで日本人の買物の為に、いつもキャンプから帰ってきて買物に行きました。キャンプにも店がありませんが無いものもありました。私はいつも日本人の為に買物に行き、ナップは絶対受け取りませんでした。毎日やっていました。夏は砂漠ですから暑くてした。冬もつらい時もありました。

ある日、一人の白人の信者が私にききました。「神父さんは朝早くから行って日本への為に働いていますが、相当の給料をもらってきて下さい」と言いました。「はい、あなたの言う通り、私は相当の給料をもらっています。私はただでこんな仕事をしません。あててじらん」。その婦人は、「百ドルぐらい?」と言いました。

た。私は、「百ドルだけではこんな仕事を絶対しません」と言うと、「では二百ドル?」と言いました。「いや、二百ドルでも私はこんな生活はしません」。との婦人は、「私は三百ドルもうつて、神父は甯りたことがあります。三百ドルはもうつていなリでしょ?」と言いました。「私はただ二十九ドルしかもうつていませんが、私は二十五ドルの為に働いてるのではありません。ただ神様の為に働きます。お金の為に働いている者じやありません。私は天国の為に働きます」と言つたう、との婦人は、「よくわかりました」と言いました。



天国へ行つた人の祈り

レブ神父という有名な神父さんは、長年間中国で働いていた有名な神父さんです。この神父さんは長年間中国で働いてから、ヨーロッパに帰られた事があります。一時帰そ、中国からフランスに行つて留学の為に働いていました。その時代は中国はまだ共産党になつていませんでしたが、沢山の中国人がフランスで共産主義を学んでおりました。

レブ神父は、親切に中国人にお話していまーたがある日のこと、一人の中国人が神父の住んでる所に来て、「私はカトリックの教えを少し学びたい」と言いました。そして正直にその目的も申しました。「実は、私はカトリック信者になるつもりではあります。私は共産主義者、無神論者です。しかし共産主義の一一番の妨げはカトリック教会だと聞いていました。ですから「どうしてもカトリック教会の教えを、徹底的に知りたいのです」と自分の心を打ち明けました。レブ神父は、「わかりました。

あなたは、本当に正直な人間ですかから私は教えます」と約束しました。神父は約束したばかりでなく、この方の目が開かれるように、この方の為に毎日祈りました。又この神父は、近くに住む肺結核患者の娘を度々訪問して御聖体を授けていましたが、この娘は大変熱心な信者で、間もなく死ななければならぬ方でした。レフ神父はその娘に、自分が教えてくる中國人の留学生の話をして、「是非ともこの方の為に祈つていただきたい」と言われましたら娘は、「必ず祈ります。必要であれば命までもその方の為にささげます」と約束しました。

それから神父はいつも通りに何回も娘の家に行き、御聖体を授けました。娘は、「例の留学生はまだ洗礼を申込みませんか？私はいつも祈つています」と尋ねますが神父は、「まだく信仰しません。お祈りを続けなければなりません」と答えました。娘の病気は重くなり、そろそろたのはちょうど夜の十二時頃でした。最後の息を引取る一寸前、娘は、「あの中國人の留学生はまだ洗礼を申込まないでしょか？」と言い、安らかに死きました。

不思議にも全く同じ時、夜の十二時頃、例の中国人は神父の家に行き、ベルを鳴らしました。神父が玄関に出てみますと例の留学生です。そして「私はどういうわけかわかりませんが、私の心はずつかり変わりました。私はキリスト信者になりたいです」と言いました。神父は娘が亡くなつたのを知りませんでしたが、調べたらちょうど同じ時刻でした。

その中国人人は間もなく洗礼を受け、熱心なカトリック信者となつて本国に帰り、その後自分の国の人々の救済の為に、長年間伝道士として働きました。

どれほど天国に行つた人々が祈りに力があるかといふことが、それによつてもよくあります。

不思議のメダイ（その一）

人から聞いた話ですが戦争中のことでした。一人の方が戦地に行く時、自分の妻

から不思議のメダイをもらいました。妻は熱心な信者でしたが、主人の方は全然キリストの教えを知りませんでした。妻は、「このメダイをはず身につけて下さい。マリア様のお守りによつて無事に帰れると思います。私も祈っています」と言いましたので主人はそつ通りにしました。この方はフィリピンに派遣され、度々危い目にあいましたが、無事に終戦を迎えた。

この方は士官でした。戦争が終ると普通の兵隊は早く日本に帰ることが出でました。米国の兵隊は日本の捕虜達をわけ、士官と普通の兵隊達を別々のところに立たせました。ところが一人の軍人が不思議のメダイを首にかけているのを見て、米兵は、「あなたは士官だが、きっとマリア様が祈そいらっしゃるから、こちらの兵隊のグループの方に入り、早く日本に帰りなさい」と言いました。それでそつ方はすぐ日本に帰りましたが、早く帰れたのはマリア様のお蔭と思い、早く洗礼を受け、よい信者となりました。

不思議のメタディ（その二）

米国にあつたことでした。ロサンゼルス市内に大きな病院がありました。

その病院には、患者と転員を合わせて五千人おりました。私は東洋人係りの神父でした。他の神父たちもその病院の中で働いていましたが、私は米国人とあまり関係になりて、東洋人ばかり世話をしました。

ある日、結核病棟を廻りましたら、三十才位の男の方が、ベットに寝ていました。また、ニコニコ笑ってそんなに病人のようではありませんでした。その病室はたぶん十二人ぐらい入ってそうだでしょう。十二人の中の二・三人は日本人でした。この方に私はちよつと信仰の話をしました。この方は移民者で英語はあまり知りませんので日本語で話しました。この方は、小さい袋に入った仏教が何かのお守りを首に下げていました。私はそれに気付き、「私も特別なお守り给您持つてます」と言って、不思議のメタディを見せたの

です。「私のお守りは、あなたのお守りよりもうんと効果があると私は信じます」とその話をしたら、その方はちよつと笑って「ああどうですか」と言いました。「しかし私のお守りを首にかけたら、どうでもこの小さいカードに書いたある祈りを口から誦えねばなりません。」と申しました。カードには便徒信經と痛悔の祈りが書いてありました。

その方は不思議のメタイをもうつて、私が渡したカードを読んでいました。その間私はベットのそばに立つて黙っていました。一・二分ぐらい待つてその方は一生懸命読みでいますから、私はその間に、もう一人の日本人の病人のベットに行きました。ちよつと部屋の向側に移つたのです。しかしずっとその病人を見下り、その別の日本人の方と話してやりましたが、二・三分したら以外にも、そのメタイをいただいた方は非常に沢山な血をほりたので、私は急いでそのベットの所に走つて行き、一人の看護人も急いで衝立たてでその人をかくしました。私はその中に入り、直ちに洗礼を受けましたが、その方

89 不思議のメタイ（その二）



はすぐ死にました。不思議のメタイをもらったのは僅か五分位前のことでした。そして一生懸命に使徒信經と痛悔の祈りを全部終りました。読み時間があつたうです。その方はメタイをソロアにてすぐに救靈を得たと思ひます。

恵まれた姉弟

ある日、私はもう一人の神父さんと、ロサンゼルスから大分はなれた田舎の肺結核療養所に慰問に行きました。その療養所には日本人の患者もいました。ちょうど昼頃そこに着き、二・三人の日本人に会って話しました。

そこにいる一人の日本人は、私は別な療養所で会ったことがありました。又教理も少し教えたことがありました。その方に洗礼を受けるようすすめたことがありましたか、この遠い療養所に移ったことを私は全然知りませんでした。その若い方は私がベットのそばに行つた時、「ああ母から電話がありましたか」と私にききました。しかし私はその方のお母さんがう何生電話がありましたか」と私にききました。その方の年は二十ぐらいで大へん病気

が重く、自分は全然助かる見込みはないと知つていました。死なない中に是恵とも私に洗礼を授けてもらいたかったのです。その為に自分のお母さんに連絡して、私に来てもらいたいということを頼んだのです。しかしその日に私がさき遠い療養所に行つたところには偶然のようでした。

その若者の名はMと、米国生れの日本人で、日本語を全然知りませんでした。お母さんは仏教信者で日本生れでしたが、息子がキリスト信者になるのをあまり望まなかつたらしくです。Mは病気が重く、洗礼を望みましたから、私はちょうど昼頃洗礼を授けてロサンゼルスに帰りましたが、その晩Mさんは亡くなりました。

それから一週間後、ロサンゼルスの病院にまいりました。Mさんと同じ苗字の娘がベットに寝ていました。同じ病気でした。名前はK子でした。私は初めてK子さんに会いましたが、K子は英語は全然話せません。米国生れで幼い時日本に行き、日本で育ち二十才頃になつて米国の

親のもとに帰りました。私はK子に同じ病気で同じ苗字で亡くなつたMの話をしました。私はK子がMの兄弟であることを全然知りませんでした。

K子は私の話を聞いてから、「Mは私の弟です」と言つたので、私はすぐにお詫びをしました。「私はどうこうことを夢にも知りませんでした。あなたの弟は本当に恵まれ、亡くなる少し前に偶然のうちに私が療養所に行つて、私の来る日を待つていました。神様のおかげにより、私はちょうどその日に行き、洗礼を受けました。」と言うとK子は涙を流し、「私はMが好きでした。

Mがどんなことを信じていたか私も学びたい。」と言いましたから、私はK子に教理を教え洗礼を受けました。それからK子はその病院から療養所に移ることになつてしまつたので、私はメリールの療養所に紹介しました。K子はそろカトリックの療養所に入り、ずっと信仰を守ることが出来ました。

約束（その一）

戦争のすぐ前にあった事です。私は時々平壌の病院に見舞に行きました。一人の大変熱心な信者のおばあちゃんが附添をしていました。このおばあちゃんは長崎の信者で、長年間附添の仕事をして、自分の手で六十人の人に洗礼を受けたことがあります。自分の看護として、病人に必ずイエス様の教の説明をして、場合によつては神父さんに頼まりて洗礼を授けたこともあります。おばあちゃんは、もう一人の附添と心安くしていました。もう一人の附添の患者は二十才位の日本人でした。自殺未遂者で肺病にかかっていましたが、一・二回病室の窓まで行って下に飛降りようとしたところを、ちょうど附添が見つけ止みました。二・三回そういうことがあったので、附添は買物にも行けないと言つて困つていました。

この話を聞いた信者のおばあちゃんは、「もしあなたの患者がカトリック

信者になつたら、絶対自殺しないでしよう。そしたらあなたはその部屋に
ずっといる必要がありません。神父さんを呼びましょう」と言ふと、さつ附添
も大賛成でした。

そこで私は見舞に行き、その若い患者に少し話をしてました。又その
信者のおばあさんも、又その病院のレントゲン係の先生も熱心なカトリック
信者でしたから、その方もその若い患者に、少し信仰上の話をしました。

そして二、三日後私は洗礼を受けました。洗礼を受けた時、私は堅く
約束させました。「あなたはキリスト信者となつたから、あなたの天国の席
はちゃんとありますか、自殺したら殺人の罪ですから、天国に入れません。
地獄に行きます。他の方があなたの席に行きます。」と言つたらさう方は、
「私はもう決して自殺しません」と言つたので、附添も安心し喜びました。

それからその患者は朗らかになり、附添が部屋を離れても無事でした。
しかし本人は自分の病気は治らないとわかつていました。大変瘦せて

骨と皮ばかりでした。私は見舞に行き聖体を授けた時、その人に言いました。「あなたは間もなく天国に行きます。私はあなたをうらやましく思いました」と言うと、その人は嬉しくてたまりませんでした。

その病院はいつも満床でしたが、私はこの方は間もなく死ぬ方とわかつていたので約束させました。「あなたは間もなく死んで神様の美しい国に行きますが、あなたが亡くなれば、きっと二・三時間すれば、別の方がこのベッドにつきますから、自分の後継者が信者になるよう祈つて下さい」と言いますと、その方は固く約束しました。「私が亡くなつても是非見舞に来て下さい」と言いました。

二・三日してその方は亡くなり、お葬式も教会でしました。私は二・三日して他の患者を見舞に行った時、その亡くなつた患者の部屋の前を通りましたが、他の方がベットに入つていました。ひげを生やしたとても元気そうな方でした。その方の名はHさんでした。私はどうしたわけか、そこに入る

勇気がありませんでした。戦争のすぐ前でしたから、米国人が日本人と会うと疑われました。そこで信者の附添がHさんに会い、それから私を紹介したらよい、とおおばさんと言ふと、「あの方は元気な方で、ひげを生やしてりて、男の方だからあまり行きたくない」と申しました。

そううちに私は別の部屋で、別人と話していくと誰かが私を呼びに来ました。私がHさんの部屋を通った時、Hさんは私を見て私に会いたいと使の方に言いましたので、私はその部屋に行きました。普通はじめて人に会った時は、先ず紹介しますのにHさんは私が部屋に入るや否や、「私は力トリックになりたい」と言いました。その時私は、あのそくなつた方は本当に約束を守つたなあ！と思いました。

しかし二・三日して戦争が始まり、私は抑留されましたが、Hさんが信者になつたかどうかわからず、しかしHさんは信者になりたいと言いました。私は公教要理を渡しました。

約束（その二）

ある肺結核療養所に、三人の日本人が住んでいました。ロサンゼルスの静かな所でしたが、私は毎週一度、その三人の寝たきりの方のお見舞に行つていました。三人とも信者ではありませんでしたが、私はいつも励ましの話を立て、本を貸したり、また度々お寿司も差上げたことがあります。

ロサンゼルスの教会の日本人の婦人会の方が交代にお寿司を作つて私に下さったから、病人や老人方に時々差上げましたら、皆大へん喜びました。三人の中の一人はじさんという方でした。じさんは大へん重症で、間もなく死ななければならぬと、誰れでもわかつっていました。それで私はイエス様の御教を簡単に説明し、出来うだり早めに洗礼を受けようすすめました。

ところで、一人の新教の牧師さんもその三人を訪問してありました。長年

間の方々と交際し、そして非常に親切にして下さったのです。そこでしさんは、洗礼を牧師さんから受けた方がよいか、私から受けた方がよいか、ちょっと迷つてありました。私の話と、そのしっかりした牧師さんの話とは、そんなに変わつてしまえん。その牧師さんは、使徒信経もよく信じていましたし、正しい洗礼も授けていたと思います。しゃんは、私よりも長く牧師さんと交際していましたから、牧師さんに義理があります。しゃんはそつと私に正面に話しました。「あなたのお話と、牧師さんのお話とは大体同じですが、一つだけ違うところがあります。それは練獄の話です。私は沢山罪を犯しましたから、死んだらすぐ天国に入る資格はないと思います。カトリックでは、死んだら靈魂の安らぎを祈りますが、新教の方では、天国と地獄だけあつて練獄はないと言います。それで私はカトリックの洗礼を受けたいが、牧師さんは長年間交際して、牧師さんの洗礼も有効だと思ひますし、一寸どうしたらよいか迷つています」とのことでした。

そこで私は、「ご遠慮なく牧師さん、その練獄の話をして下さい。牧師さんはしっかりした方ですから、あなたがカトリックの洗礼を受けても、決して怒らないと思います。正直にその話をして下さい。」と申しました。じさんは「そうしますよ」と言って、牧師さんにその話をすると、「あなたがカトリックの洗礼を受けたいなら、私は反対しません。カトリックの洗礼を受けた方がよいのです。自分の信仰ですが、自分がよりと思う道を歩まねばなりません」とおっしゃいました。それで私はじさんに洗礼を受けました。

洗礼を受けたから、私は時々聖体を授けに参りましたが、じさんは非常に喜んでいました。自分が間もなく、神様のみ国に呼ばれることを楽しみでいました。あまりにも楽しんでいるので、私はじさんに約束しました。「あなたが亡くなつたら、私は必ず丁寧にお葬式をします。あなたは天国に行つたら、ここに残つていろ二人の日本人に洗礼を受けさせて下さい。また、あなたがアベントに入る後継者にも特別に祈つて下さい」と願いましたら、じさん

は「必ずその通りします。ここに残つていろ二人の日本人と、私の後継者の為に特別に祈ります」と約束しました。

シャイムはお金はありませんでしたが、入れ歯がありました。入れ歯の中に金が入つてしまつた。死ぬ一、二週間前、その入れ歯を、私に渡して、「これを売って下さい」と言いましたから、私はそれを歯科技士に見せ説明しましたら、その方は入れ歯の値打ち以上に買ひ、10ドル下さいました。シャイムはその10ドルの中から、2、3ドルを自分の世話をすゝ人にふれとして差上げ、あとお金は、お葬式とミサの御礼として私に下さり、自分の為にはテーブルの上にエセントだけ残しました。

シャイムが亡くなつたので、私がお葬式をしましたが、お葬式に参列したのは、その牧師さんだけでした。そして彼はカトリック墓地に土葬されました。亡くなりから一週間位して、私はその療養所に行きましたと、シャイムのベッドに一人の中国人が入つてゐます。私は一寸話しかけましたが、全然英語

がわかりません。困つて「どうへ、ちょうど長年中國で宣教し、病氣になつて米國に帰つていた一人のメリノール会の神父が私の家に来ました。この神父は腎臓が悪く、あと二ヶ月しかもたないと死の宣告を受けていました。しかし寝ていませんでした。時々自動車にも乗りました。私はその神父に頼んで「是肺私と一緒に療養所に行き、一人の中国人人に会つてほー」と頼みました。

その神父は中国の公教要理をもつてました。私が一緒にその療養所に行きました。この神父は中国のハツカで仰つてましたが、その中国人の言葉はハツカの言葉でした。神父は驚き、「これは不思議なことだ。この言葉を話す中国人はそんぢない」と言いました。そして度々行つてその中国人に洗礼を受けました。

私は間もなく朝鮮に帰ることになつたので、私の後任として、日本人の神学生を呼びよせ、じさんと同室の一人の日本人に洗礼を受けさせました。もう一人のKさんは、なかく洗礼を受けませんでしたが、戦争中、日本人が

収容所にいた時、ロサンゼルスのメリノール会の神父が、その人のいる療養所に他の人の為に行きましたが、ちょうど帰ろうとしていると、一人の方が呼びに来ました。「KとY方が是非ともあなたに会いたい。カトリックの洗礼を望んでいます」と言うので、神父はすぐそろそろKさんに会いましたら、Kさんは喜んで洗礼を受け、翌日亡くなりました。それでじやんの約束は完全に実行されました。

Kさんが洗礼を受けるには、五十年位かかりました。自分のベストに入った方が一番早かったです。本当にすばらしい事で、私はいつまでもじやんのことを忘れられません。密入国の人で、本名にしつかりした人でした。

地上に於るのは沢山な方が、自分の家族や友人達を天国に導きたいのですが、いくらお話しても、いくら祈っても、親戚や友人達は、あまり神様のみ教えに興味をもたないようです。しかし死ぬ時にもし、「私は天国に行つてから必ずマリア様に会つた時、その方の救靈を願います」と望みながら死にましたら、その祈りは確実に生き入れられると私は信じています。

さしき入れられた祈り（その一）

私が戦争中、米国の日本人の収容所の中で、教会を受持つていた時、Pさんは若い男の方が洗礼を受け、それから私の手伝いをするようになります。Pさんは教理を子供達に教えたり、また収容所の中で私に代つて自動車の運転をして下さつたし、また私の手紙をタイピングして下さつたりして、業務の仕事を大いに手伝って下さいました。

戦争が終つたので収容された方は皆、収容所を出るようになりますが、Pさんは召集され軍隊に入りました。そして一年たつてからPさんの部隊はアラスカの方に派遣されることになりました。Pさんはアメリカ生れの方で、したが日本語もよくしゃべれました。アラスカより日本に生きたかったので、目上にその事を願いましたが、「もうあなたの使命はちゃんときまつていろから、部隊の人と一緒にアラスカに行かねばならぬ。」と言われました。

それでPさんは、自分の荷物を駅に持つて行き、汽車に乗せ、三時間後に出発することになりましたが、都合よくその近くに教会があつたので、Pさんはその教会に入つて三時間程熱心に祈りました。その祈りは「どうか神様の全能によって日本に派遣されますよう」、又もし日本に行くことが許されたら神父の手伝いをします」と約束しました。Pさんは特別に聖母に頼んでおきました。

それから汽車が発車する時間になつたので駅に行くと、誰かが自分をやっかりています。「どんな用ですか?」と聞くと、その方は「あなたの行先は変更になつた。あなたは日本に行くことになつたから、すぐ自分の荷物を汽車からおろしなさい」とのことでした。Pは大急いで荷物を降ろした時、汽車は動き出しました。

Pさんは自分の兵舎にもどり、暫くしてから日本に来ました。ザマに着いて船から降りると早速チヤフレンの本部に行き、「自分はチヤフレンの手

伝いをしたい」と申込みました。

米国軍隊にはチャーチレンがあります。又、一人一人のチャーチレンに一人の手伝い人があります。Pさんはその神父の手伝いをする約束をマリア様にささげていたから、どうしてもその約束を実行しなければならないと思っていました。しかしチャーチレンの本部に行つてきりでみましたが、チャーチレンの手伝いをする人は、もう充分ありますから、その仕事はもうえませんでした。それで仕方なく、自分の部隊の人と一緒に、目上がきめた所に行きましたが、偶然のようにPさんは、京都の三条教会すぐ近くに住むことになりました。

ちょうど十二月八日、マリア様の祝日にPさんは、突然私の部屋に入つて私をびっくりさせました。私はPさんが軍隊に入ったことも全然知りませんでした。軍服姿のPさんがマリア様の祝日に、私の目の前に立つているのですか、Pさんは非常に心配してこうようでした。わけをきくと、「私は願いを立てて、神父様の手伝いをする約束をしていたのに、その約束を

守ることが出来ないのです。どうしたらよくなりますか?」と私に言いました。そこで私は、「あなたは以前、私の手伝いを米国でよくして下さったから、ここでも軍隊の仕事を毎日早く終りますから、夜にでも、また休の日にでも、この教会に来て私の手伝いをしたら、あなたの約束を実行することになります。安心してどうどうううにして下さい。」とすすめました。Pさんは、大変ようござんばんして、ずっと私の手伝いをして下さいました。休の日、また休の時間はいつも教会に来て、救済の仕事を手伝いをしたり、私の手紙を書いたりして、一・二年たちました。

やがて自分の復員の時が近づきますと、Pさんは「もうしばらくあなたの方手伝いをしてから、もう二年間志願します」と言いました。そして二年が終った時、米国の親のもとに帰りました。

さき入れられた祈り（その二）

終戦後、私は何回もカリフォルニヤの信者から、色々の救援物資を送つていただきました。食糧品は勿論のこと、古着もお金も沢山いただきましたが、ある日、古着の箱から上等のオーバーを出して誰かにあげようとしたら、そつポケットに一枚の紙が入っていました。その紙にこう書いてありました。

「これは私のただ一つだけのオーバーですが、もう春になりましたから、暫くお間違いません。私は失業しています。しかし寒くならないうちに、神様はきっと私に仕事をお与え下さると思います。どうぞこのオーバーを、私の兄弟に上げてください」という手紙でしたが、そのオーバーを寄附した方の名前と住所が、その紙に書りてありました。

数年たつて私は病気になつてカリフォルニヤに行き、入院していました時、オーバーを寄附して下さった方の住所は、その近くでしたから、ちょっと連

絡しましたら、その方はお見舞に来て下さいました。その時私は、「あのオーバーを寄附してから冬にならないうちに、またオーバーを買うことが出ましたか?」と尋ねると、「はい、出来ました。すぐ仕事を見つけて新しいオーバーを買うこと、出来ました。さればかりでなく、私は神様のお恵みによつて、妻ももらいました。今は沢山子供がいます。」とのことでした。私は「自分の子供と神様にささげて下さい。少くとも一人は聖職者になるように神様に祈りをささげ下さい」と言うと、「そのお話はもうおそいです」と言います。なぜかといふと、その方は「私も妻も、子供が生れたらすぐ神様にささげていますから、あなたが今、そういう話をすら必要はありません。もう既にしています」と答えました。本当にしつかりした信者でした。この方はPさんでした。

九日祈祷

カルフオルニヤの日本人の収容所で、話です。ヨーハンとソウ婦人は、戦争が終つてから、どうしてもその収容所を出なければならなりに、行く所がありませんでした。戦前はロサンゼルスに住んでいましたが、借りた家について、戦後は借りる家がありませんでした。それで大へん困つて、親戚の家に主人と一緒に厄介になつていましたが、本当に下自由な生活でした。一日も早く自分の家がほしかつたが、空き家はなかなかありません。それでヨーハンは聖ヨゼフに対する九日祈祷をはじめました。

毎朝早起きしてバスに乗り、一番近いメキシコ人相手の教会に通いました。聖ヨゼフに対する祈りを唱え、ミサにあすかり、聖体を拝領し、又バスに乗つて自分の家に帰りましたが、九日間祈つてもなかなか家を見つけることが出来ません。それで又、九日祈祷を始めました。今度はその九日目にバスで帰る途中、全く知らないメキシコ人の男の人か、ヨーハンに名刺ぐらいの小さい紙を渡し、

「こと」とだけ言いました。その手て紙に住所と番地まで書いてあります
たので、メキシコはすぐ、その日に調べに行きましたと空家があり、家賃は安
いし、すぐに入ることになりました。二番目の九日、祈禱の日に。

私は、あの方はメキシコ人ではなく、聖ヨセフ様と思います。

メキシコは、ずっとその家に住み、毎年いつも私の仕事に対する寄附にて
下さいました。



子供の祈り

カリヲオルニヤの収容所は季候も住居もよかつたので、ある人は出でなくあります
んでしたが、戦争が終つたので、どうしても出なければなりませへ”でした。

そこのある人は、時々ロサンゼルスに行つて家をさがし、ある人は一・二ヶ月間、
毎日のようにさがしましたが、家を見つけることが出来ません。そのため、一つの家
に二・三世帯が住んでいました。

Sちゃんという家族は、お父さんは病氣で非常に弱っていました。お母さんも
弱く、この夫婦は未信者で子供もいませんでした。二人とも教会に来ていましたが、洗
礼を受けさせてもらっていました。一人の娘は、松葉杖で歩くそむき身体障害者でし
たが、もう一人のE君という十才ぐらゐの男の子が私の所に来て、「神父さん、私
達は近づいて收容所を出なければなりませんが、行く所がありません。親切な
親戚もなしし、父も弱つてゐるから、家を探しに行くことも出来ません。どうし

たらめりでしょか？」ときりました。そこで私は、「あなたは毎日お祈りもして教理も勉強していますから、毎日ここに来て、御聖体の前で祈りなさい。また自分の言葉で、ヨイエズス様よ、どうか私の家族の為に家を見つけて下さい」とお願ひしなさい」と言いました。

それからE君は本当に熱心に、毎日祭壇の前にひざまずいて、誠心こめて祈りました。それからお父さんが身体が弱いのに、一ペん位はためしてみようと思つて、バスに乗つてロサンゼルスに家を探しに行きました。すると以外にも、その日、すぐに空いた家を見つけました。その家は教会のすぐ近くでした。

私は、それから間もなく日本に参りました。八年位たつてから、その子供のこと思い出出して、教会の神父さんにきいてみたら、その子をはじめ、その家族は皆、信者になつたところでした。

やはり幼い子供の祈りは、本当に力があると想ひ、感謝しました。

日曜日を守ることについて（その一）

韓国の人々が、遠い所からも日曜日にはミサに必ず来ました。ある方は二時間も歩いて来ました。皆熱心に信仰生活をしていましたが、教会のすぐ近くに、一軒の冷淡な信者の家がありました。この家族は、日曜日にいつも働きに行きました。田畠に去かけて信仰上の務めを全然果しませんで、他の信者は度々その家族に注意しましたがきません。一寸珍らしいことでした。

ちょうどある日曜の朝、ミサが終った時火事が起りました。北朝鮮の家は皆藁ぶきでした。燃えるのは普通屋根だけですが、一軒の家が燃えたら隣の家にも必ず移るのです。幸いにその冷淡な信者の家の周囲の人は、ちょうどミサが終った時、自分の家を守ることが出来ました。信者の家は皆無事でしたが、畠に行っていた人の家だけ、丸焼けになりました。

日曜日を守ることについて（その二）

カリフオーレニアの収容所の中には一人の中国人がいました。この方は日本人の娘と結婚することになつてしました。二人共信者でありませんでしたが、私の教会で結婚させました。それから日本人達は、どの中国人をとても可愛がつて下さりました。

収容所には二万人位の日本人がいましたが、どの中国人は、ゆっくりキヤンブにいて、私はどちら方とお嫁さんに洗礼を受けました。洗礼を受けた時、私はどの中国人に言ひました。この方は百姓でしたが、中国人は日曜日にも働きます。「今度あなたはキリスト信者となりましたから、日曜日には働くことは出来ません」と。するとどう方は、「私にとの話をする必要はありません。私はこの国に来店時は日曜に働きましたが、ある日曜の朝、私はトラックターに乗つて畠に行く時、一人の人が大きな声で、「おい、どこへ行くか。今日は神様の日じゃないか、働きとはいつけない」と言つたので私は笑い、「そへな迷信は、私は信じません」と言つて畠

55 日曜日を守ることについて(その二)

に行き、仕事にとりかかつたら、十分もたたないうちに私のトラックターはこわれて、
その為に三日間全然仕事を出来ませんでした。修繕代も高くついて、本当に
損をしました。その後私は絶対日曜に仕事をしなくなりました。“ですから私
はちゃんと日曜に休む習慣がついていますから、洗礼を受けても大丈夫です”
と答えました。



日曜日を守ることについて（その三）

松阪の教会を建てる時に京都の本部の方で建築家と契約し、そして仕事をとりかからうとした時、私は請負の方に強く言いました。「カトリック教会では、一週間に六日間だけ働いて、一日は、日曜日は働かないことになっています。ですからこの教会を建てる時、絶対日曜日に仕事をしないように」と言いますと、その建築会社の社長さんはガツカリして、「そんなことをしたら、私は必ず損をします。私はせっかく上手な大工を遠い所からここにつれて来て、今までどこへ行っても、日曜日にも働きました。時々雨降りの日もありますが、どの日に休んだらどうでしようか?」と私に言いました。しかし私は、「雨降りの日があっても、日曜日だけは仕事をしないことにして下さい。日曜日に仕事をするつもりだったら、私はそんな教会は要りません。テントを張つてもよろしい。神様に春き乍ら教会を建てたら、それはよくなりと思います。」と言ひますと、社長さんは大変心配して、「私はおそらく

損をします」とかっしゃったので、私は早速約束しました。「日曜日毎に、どれ位の損害を受けたかちゃんと記録し、計算させて、落成式の時に契約書以上のお金と、その損をして分をばらす払います」と言いましたら、社長さんは安心して仕事に取りかかりました。

社長さんは東京の方でした。東京に帰つてその次の土曜日の晩、自分の職人達に、「明日は仕事を出来ない。この教会の神父は本当にきびしいんだ」とグズグズ言つていきました。早く仕事を片付けたいと思つてしまつたから。

しかし次の朝は大雨でしたから、働く許しがあつても働くことが出来ませんでした。その次の土曜日も晩にも、その大工さん達はぐずく不平を言い乍ら夜寝みました。

ところが次の朝、日曜日は又雨降りでした。その次の土曜日も全く同じ事でした。ふだんの日は天気でしたが、日曜日は三回引つづいて雨が降りました。自此から大工さん達は、日曜日に休む習慣がついて、ゆっくり手紙と書いたり、近

くの友人、親戚の家を訪向したりして、いつも日曜のまろぐを済ませみに待つていました。また一人の大工さんは教理を聽きたいと言い、教理の解説を聽き、その後近くの四日市^{シマヘイ}の教会が建つた時、洗礼を受けました。

やがて落成式の日となりました。私は社長さんに、「日曜日毎に、あなたの職人達は皆休みましたが、どれ位の損害を受けましたか?」私の方から契約したお金の上に、特別にお金を払つてあげたい」と申したら社長さんは、「神父さん、私は少しも損しませんでした。かえって他所よりも、よく仕事^{ヨガ}がはかどり、本当に神様に感謝しています。」と申されました。

やはり神様に従ひましたら、神様は必ず祝福して下さるに相違ありません。

みどりのスカプラリオ

三条の教会にいた時、ムレット神父さんから「これは進駐軍の方から頂いたものですが、あなたは是非とも使って下さい。聖母の御力はすばらしいから」と言って十八枚のみどりのスカプラリオを頂きました。私はこの時、初めてみどりのスカプラリオを知りましたが、その由来書を読むと、聖母がこれを授けた時、主に冷淡な信者の信仰の回復の為だと書いてありました。しかし問題は、私はその頃、あまり信者に会うことが出来ませんでした。三条教会の信者は非常に少少でしたから、熱心な信者も不熱心な信者もあり知りませんでした。私の会う方は未信者ばかりで、主に仏教信者と交際していました。度々病院に行き、キリスト教を学んだ事の方と交際していましたが、そろそろ方の為に使っておりかどうか、私には少々の疑いがありました。

その日の午後、三人の信者を同伴して済生病院に参りました。ポケットに

今朝ソーダいた二・三枚のみどりのスカフラリオを入れてゆきました。その日、二人の重症の方に洗礼を授けましたが、帰りかけに、お医者さんの部屋に一寸寄りました。病院の方医者さんは私の来る所をいつも喜んでおられました。私は度々その病院に色々の食糧を送つたことがありました。先生にお目にかかる時、「今日私は二人の病気の重い方に洗礼を授けましたが、もう病気の重い方はおりませんでしょ?」と尋ねますと先生は、「もう一人います。が無意識です。十日前ばかり何もわからず、食事もしていません。おそらく無意識のまゝ三日以内に亡くなるでしょう」とのことでした。私は「そぞ病人が無意識のまゝであります。私はその病人の側でお祈りを捧げたいと思ひます」と言つたら、先生は一人の看護婦と共に、私とその部屋に案内して下さいました。

一人部屋でした。早速ソーダベットに寝て、婦人のそばに行き、一寸話一かけました。が、その婦人は何もわかりませんでした。その時私はスカフラリオオーーと思いまして、一つポケットから取り出し、婦人の頭に当てて、『聖マリアの汚れなき

み心よ、今も臨終の時も我等の為に祈り給え」と唱えました。スカブリオのみ祈りは英語で書さりましたが、私は日本語で唱えました。それからもう一ぺん唱えようとして、「聖マリア」まで唱えましたら、その婦人は急に両手を合わせて、「私の罪を赦して下さい」と言いました。お医者さんと看護婦さんは入口に立つていましたが、非常に不思議に思いました。

私は、二つの奇跡だったと思いました。一つは、その婦人が忽ち意識を回復したこと、もう一つは、忽ち手を合わせて神様に罪を赦して願いしたことです。その婦人はハラキリとよくわかつていましたから、私は十分間位お詫して、イエス様のみ教えの一一番必要な事柄を簡単に説明して洗礼を受け、聖名としてマリアという名前をつけました。翌朝その婦人は安らかに亡くなりました。

同行したＫさんは、その不思議な出来事を見て感じ、「みどりのスカブリオを作りまへようか」と言いました。私は勿論大賛成でしたが、そのプリントは少し複雑ですから出来るかどうか疑問がありました。しかしＫさんは、うまく作って下さいました。それ

以来ずっと今日に至るまで、私は布教に出かける時、いつも、みどりのスカーフラリオ、をはらず持参しています。

三条教会時代の布教活動

終戦後私が三条教会に来た頃、京都には三条と西陣と高野しか教会がありませんでした。西陣と高野は本当の教会ではありませんでした。私は三条を本據にして初めて行つたのは宇治田原でした。宇治田原から野菜をもらつた時、私は考えました。三条の教会一つでは、どうしても沢山の教会を造らなければいけないと思いました。朝鮮にはいくつもの教会がありました。宇治田原から野菜をもらつた時、私は日曜日に宇治田原の青年団の方に会いたいと言いました。そして七、八人の青年を大さに車に乗せて宇治田原に行きました。出発する時、グラザーフレメントが庭に立つて見送り、「これは歴史的な動きだと思う」と言いました。私も、もしかすると

歴史的な旅にすぎるかもしれないと思いまして。

宇治田原に行きましたら、どうした事が青年団は集つてなかつたので会えませんでした。ところが道で一人の方に会いました。その方は、"せんじょうじ"の方でした。"せんじょうじ"に来て下さい」と言いました。それからずっと"せんじょうじ"に行く事になりました。その村に四つの公民館がありますが、その四つの公民館で、火曜日毎に同じ時間に教えてました。主に子供でしたが、だんく信者となりました。

それから田原にも青谷にも行き、次から次に色々の所に行き、しまつには幾つもの所で教えるようになりました。宇治田原(四ヶ所) 田原(二) 青谷(田)
田辺(三) 八幡(一) 精華(二) 小野郷(一) 中川(一) 大森(一) 久世
村(一) 山科(二) 宇治(二) 桂には病院にだけ行きました。

又、毎日昼の間は、一つ二つの病院に行きました。ある病院は毎週、ある病院は一月に一回、ある病院は二ヶ月に一回行きました。京大、府立、済生、西陣、桂、更生、宇多野、青谷、伏見国立病院等、主に結核の所が多いですが

京都の病院は殆んど行きまーた。臨終洗礼は毎日のように沢山受けまーた。一月に一度、大抵の人に聖体を受けまーた。Mさんと一緒に行き、私が聖体を授ける間Mさんは朝からに家族の人と話して非常によかつた。Mさんは道もよく知つていました。いつも一緒にジープで出かり、ジープの中で食事をして本当に楽しつでした。伏見の国立病院に行つた時、その病院はバラックで本当に貧しい所で、古い兵舎でした。初めて行つて、外国から引上げた人が多いうことを聞き、一人の看護婦さんと廊下で出会い、「私は三条教会から見舞に来ましたか、こゝには淋しい生活をしている病人が多いと思つます。皆に会えませんが、一番病気の重い人をお見舞しない」と言ひましたら、八人部屋に案内して下さいました。看護婦さんは私に「この部屋の人は八人ととも胸の病氣で、おそらく八人ととも死ぬでしよう。助かる見込みはありません」と言ひました。私は部屋の真中に立つて十分間位話しました。イエズス様の話として、洗礼には必要な話をした後、「罪の赦しを受けた方は必ず極楽に行きます。極楽はとても美しい所で、誰でも望む人は行くことが出来ます」と、

私は一人一人のベットを廻り、小さく声で一人一人に聞きました。「私の話をよく聞きまし
たか。罪の赦しを受けながら洗礼を授けます。心の中で、『神様よ、私の罪を赦して
下さい』と一ぺんだけ言つたら、私は洗礼を授けます」と言つたら八人と洗礼を申
し込みました。

部屋の真中のテーブルの上に、ローソクと十字架を置きて洗礼を授けようとしたが、
一番端の丈夫とうな人はレントゲン室に運ばれました。その人は臨終の人ではないと
思いますが、洗礼の時その方だけいませんでした。あとの七人に洗礼を授けましたが
皆喜びました。

それから二週間経つて、その附近に以前伝道士をしていた方がいましたが、そのお
じい丈に頼んでその部屋の人々に初聖体の準備をさせていただきました。二週間経つ
て聖体を受けに行きましたが、あるベットの人は死んで居ませんでした。代りの人も重
症でしたが、その人には聖体を受けなかつたので、後で私に「どういうわけで私を差別
するか」と文句を言いましたから説明しましたら、その方は「自分も洗礼を受けた

い」と言ったので、後でその方にも洗礼を受けました。最初の日レントゲン室に行ついた人には、後に公教要理を上げたら、要理を丸暗記しましたが、退院したので洗礼を受けた機会がありませんでした。

後で私は考えました。日本人は団体で洗礼を受けた場合は一番よいと思いました。もし私が一人だけに話して、一人だけに洗礼を受けたら失敗したと思います。皆に話して洗礼を受けさせた事は大へんよかつたと思います。一人も考えてせてもらうと言った人はありません。皆その日に受けました。

宇多野療養所には、いつも水曜日毎に行っていましたが、普通は五、六十人の方が洗礼を受けていました。殆んど毎週二人位、新しい人が洗礼を受けました。たまに三、四人受けたこともあります。まだ生きている間は、私は出来ただけ毎月一度、皆に聖体を授けました。ある部屋に八人位の人がありました。そりうち二、三人は洗礼を受けましたから、時々聖体と授けに行きました。その部屋の一番丈夫そうな人は、私がいる間は黙つていましたが、私が部屋を出てしまつてからは、いつも宗教をあ

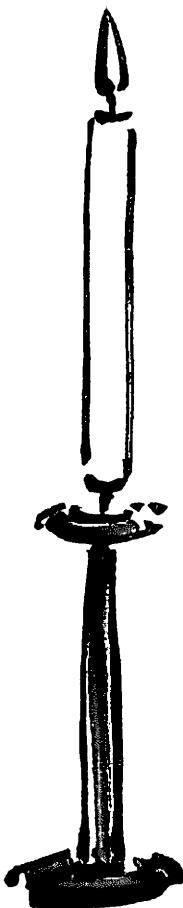
やけていました。自分は無神論者だから、宗教は迷信だと思つていました。しかしある水曜日に私は他の部屋にいましたが、誰かが私を探しに来ました。その部屋の丈夫どうな神様をあがけういた人が喀血し、自分は助かる見込みがないといふことをよく知り、洗礼を授かりたいと言いました。私は大急いでその部屋に行きましたと、その人は、もうすぐ謙遜に「私は本当に悪かった。私を救って下さい。私の罪を救って下さい」と言いました。私は「安心下さい。山程罪がありても、イエス様はお詫びして頂から赦されまし」と言つて洗礼を授けましたが、その人はすぐ亡くなりました。

私は臨終洗礼の場合、男はヨゼフ、女の方にはマリアという靈名をつけました。少し元気な人は自分で靈名を選ばせました。ある日、四人のヨゼフが同じ部屋で死んだことがあります。

私は宇多野で朝の九時から十二時まで働きました。二の方が私を安内しましました。私はそれへ言われる通りにしました。「明日、十二人の人に聖体を頼みます」と言われたらそれを通りにしました。九時から十二時まで死体の祝福、新しい人の洗礼や

聖体を受けたりしました。参りますと先ず十二の方に聖体を受け、それから今日の洗礼は何人にするかとります。案内者の方は前もって、誰が危篤か、誰が洗礼を望んでいるか調べます。そして私をソフモ危篤の方の部屋に案内しました。危篤の人には教え、洗礼を受け、必要なことを聞くには普通三十分かかります。それが終ると死体室に行き、亡くなつた人には祝福と与えました。又、終油の紋跡を受けました。それでいつも十二時まで忙しいでした。

沢山の人々が宇多野で洗礼を受けました。臨終の洗礼を教会の帳簿にのせる事、勿ち一杯にならうて別な帳簿にのせるよう言われたので、三条教会以外で洗礼を受けた人は、別な帳簿に書きました。



宇多野療養所のじさん

69 宇多野療養所のじさん

じさんは宇多野療養所に何十年も入っていました。三回程ひどい喀血をして死にかけました。喀血する毎にじさんは直ちに教会に連絡して終油の祝跡を受けました。

三回目の喀血の時だったと思いますが、三条の教会に連絡したら私はいませんたゞで、アルセッカー神父さんが終油の祝跡を授けに行きました。その時は全然助かる見込みはありませんでした。血と全部は止ってしまって、今度こそしまったと思いました。じさんはいつも私の手伝いをしていた方で、私が毎週水曜日に宇多野に参りました時、じさんはいつも私を重症者の部屋に案内して又洗礼を授けた場合には大抵じさんも代文となりました。じさんがいなかつたら私も困りました。じさんはそのひどい喀血をした後、終油の祝跡を受けた後、先生達は、「あなたは回復する見込みがない」とおっしゃつても、じさんは神様に約束しました。「治ればずっと神父の手伝いをしたい」と、不思議にもじさんは早く治り、そして又私と一緒にくる事になりました。何百人の人

かじさんのが陰で、宇多野療養所に於ソラ洗礼を受けました。じさんは死なないで退院しましたが、今宇多野療養所の近くに住んでいます。

臨終洗礼をする方は、特別神様から恵まれました。

罪の償い

この話は一人のフランス人のレスターから聞いたことですが、「私の父は信者でしたのに、なかなか教会に行かずミサにあすかりませんでした。家族の者は皆行そりましたのに。しまいに父は中気になかり、七年间寝たきりでしたが、ミサに欠席したのも、ちうど七年間でした。それは練獄に行く代りの償いと思います。私の父は七年间寝たまゝで、ミサに行きたくても行けませんでしたから、償いとなりました。もし父がミサに行ついたら、その七年间止歩いたでしょ」と言いました。私もそう思いました。出来ただけ、この世で罪の償いを果たすようにしなければなりません。

稻村の魚

71 稲村の魚

戦争が終つてから、京都府内には八千二百世帯が困窮していました。さう中には年寄の方とか、あるいは数人の子供を養つてゐる未亡人たちが大分混じっていました。主人はまだ戦争から帰つて来ない、戦死して、或いは捕虜となつて沢山ソ連に残つていました。みんなさんは大変苦労していました。無論、毎月ナレだけの補助金と市役所から貰つていますが、とても足りませんでーた。又お金があつても殆どの食物が統制物で、配給になつてしまつた。日本の方はよく魚を召し上がりますが、魚も功符制で、又めつたに当りました。せんざでした。特に京都府はかなり海から離れていますから皆お魚をほしがつていました。ある日、府、庁の食糧課長さんと話しました、「舞鶴の近くの稻村に最近鮎あわが沢山とれていますが、一ぺん稻村に行つてくれませんか」と言われました。私は大へん忙いでしたが時間と割りて、その課長さんと私の手伝いをなさるNさんと一緒に乗せて、稻村に行きました。冬の真最中でした。道は舗装してないばかりでなく、非常に悪ひで

した。稻村の近くに行きました。天の橋立を渡つてしばらく進みました。道がはつきり見えなくなりました。他の自動車は通らないし、講がどこにあるかわからず非常に危ないでした。しかし神様におすがりしながら、うまく稻村に着きました。ちょうど昼でした。

村の一一番大きな建物は魚業組合でした。その事務所に入つてみると、組合の主^{おも}だつた五、六人の方がおりまして、親切に私共の話を聞いてくれました。私は非常に疲れました。京都から稻村までちょうど五十マイルでした。あんまりにも波がれていたので、極く簡単に十五分位組合の方に詰めて、「お魚を寄附してくれませんか」と願いました。組合の方々は、「実は私共は油がありません。漁船を動かすには油が必要です。鮪^{カサゴ}は少し陸から離れたところに行かなければ、さかく網にかかりませんから油の問題だ」とおっしゃいました。「しかし、もし漁がありましたら必ず京都の方に少し送つてあげます」と親切に漁師たちは約束しました。

私は極く簡単に説明しました。「私共人間は皆兄弟です。皆同じ神様の

み手によつて創^{つく}られました。お互^にに助け合^わねばなりません。京都の八千二百世帯の食^いい方々は、長らく魚を食べたことがありません。もし稻村の皆様が少しでも寄附して下されば、天の御父神様はきっと祝福して下さると私は信じています。漁がありましたら是非とも少し送^つて下さい」と頼み、京都に帰^つて参りました。

ちょうど三条教会の庭に入りましたら、ジーフス一つのタイヤがありましたが、調べましたら空気が全然入っていませんでした。

の後ろに余分のタイヤがありました。パンクしました大へんだったけれど、神様はちゃんとといよいよにして下さいました。その後私はぐっすり眠りました。少し元気が回復しましたが翌日の午後、稻村から電報が来ました。“二百貫の鰯を送^つた”と電報でしたが、二、三日経そくわしく、説明の手紙をいただきました。その手紙にありますと、漁師たちは油がありませんから、その日、私共が帰^つてしまつてからすぐに船に乗^つて、極く近^づいところで網をおろしました以外にも、たちまちお魚が一杯かかりました。皆大喜びで自分の船に一杯積んで港に帰^つて来て、早速二百貫のお魚をその日に送

りました。

それから一週間位たつてから、私共はお願いに行かなかつたのに、又二百貫（八百キロ）のお魚を送つて来ました。その漁師たちは本当に心の真直ぐな方でした。私は京都の貪しい方の為に物資を寄附していただきた場合、まるべく自分はそういうものを食べないことにしていました。自分の物ではなく貪しい家族の物だと思って、ああいう貴重な物を私が食べましたら盗人のような気がしたんです。されど普通は食べてくれません。しかしとの奇跡的に獲られた鰯は、私は神様におわびしながら二匹食べました。大へんおいしくて、ふだん私は、お魚はあまり好きませんが、その二匹の魚は大へんおいしくて、二十センチもある大きい鰯でした。

その後私は一ぺんも稻村に行つたことがないのですが、二・三週間前、その附近で布教しておられる神父さんは「稻村にはカトリック信者はおりませんか?」と尋ねますと、その神父さんは「一人おります。漁業組合の方だとおっしゃつたんです。その魚を寄附した人に信仰のお恵みが与えられたらいいです。

周山方面の布教

終戦後、三条の教会に参りました時、京都教会内にはただ三つの教会がありました。私はどうして巡回所とつくりたかったと思いました。それで洗礼を受けたりすぐに、男の方ばかり先生と名付けて手伝いさせました。教会に三台の自動車がありましたから、夜にながりまた、ちょうど六時頃出發して巡回所に行きて教理を教えました。巡回所として公民館とか、或は個人の家、郵便局、安定所、お宮さんやお寺を使ったこともありました。

75 周山方面の布教

金曜日の晩には、いつも周山方面に参りました。五六人でジープに乗って、少しのパンとお茶を夕食としていたとき乍ら、目的地に進みました。私は運転しましたからいつも一番遠い所に行きました。先ず中川村に一二人の方を降ろし、次は小野郷村にも二人を降ろし、残りの一人と私は一番奥の大森村に行き、お宮さんで教えていました。

一年ぐらいお宮へで教えた時、私の手伝いとなりるSちゃんは、もっと適當な所を見つけました。大森村に一つの廃寺がありました。その寺には坊さんがいませんでした。以前は一ヶ月に一度位まで村人の御先祖の為に祈りましたが、どうしたわけか、その方は来なくなりました。幸いにその檀家の中の一一番有力な方の奥さんがカトリックの洗礼を望んでいました。私はその寺の空き部屋を用意し、その方に申しました。「カトリック教会でもせきなうた方の靈魂の安らぎを祈りますから、よろしかったら、私はその坊さんに代つて、月に一度皆の靈魂の安らぎの為、ミサを捧げます。お礼は全然いりません」と約束しました。

ちょうど八月十五日に檀家の方々は集つて、皆の意見を聞いたら皆賛成しましたが、私はその村のお坊さんとなつたのです。司教様も承知して下さいました。さすがの仏像にはカーテンをその前に掛け、別なところに祭壇を作つて約束通り、定期的にミサを捧げ、又教理も教えましたが、村の方は、あまり熱心に来ませんでした。それでも私とSちゃんは欠かさず毎週金曜日に参りました。

私は度々家庭訪問をし、箱ごとの手伝いをして、出来ただけ村人の手伝いもしまた。洗礼を受けた人も一二人いましたが、間もなく私は三条教会から青岑の方に移ろことになりました。そのお寺を他の神父さんにまかせました。その後そのお寺はどうなつたかわかりません。

不思議な事がありました。お宮ごとを使つて、いた時、ちょうどお寺に移る二・三日前に台風が吹りて、大きな杉の木がお宮ごとの私共が使つて、いた家に倒れ、その家をつぶしてしまいました。その時私共は既に、そのお寺を使う許しを得ていましたが、まだ一度も使つた事がありませんでした。それで神様は、ちょうどよい時に、そのお寺を与えて下さったと思ひました。

その村の人は大変貧しい生活をし、大変忙しくでした。教会に対し好意をもつていましたが、数人の人は別として、あまり宗教に興味をもつていなかつたようです。しかし私はずっとその村人の靈魂の救済の為に祈りました。布教する時には、ただ一か所ばかりでなく、いくつもの所で布教しなければなりません。一つ二つの所で失敗しても、他の

所では案外成功するかもしれません。ちょうど物を燃やす時に、大抵の人は幾つもの所に火をつけてます。風の都合で、せっかく火をつけても、西の方につけても風が強くなれば、その火は消えるかもしれません。それで幾つもの所に火をつけたら、おそらくどこか一つの所では燃えるでしよう。布教する時にも沢山な所で教える必要があると思いません。イエス様がおっしゃった通り、「どこへ行っても私の教を伝えなさい。私は火をつける為にこの世に来た」とおっしゃいました。私は今でも大森村の方の為に祈っています。いつの日か、その村が信者の村になるかもしれません。

小郷郷村でも、布教する所はお寺でした。三条の教会で、ちょうど聖女マグダレナのマリアの祝日に、私はMさんと、もう一人の青年に洗礼を受けました。ちょうど金曜日の晩、布教に出かける日でしたが、その青年を棄せて行き、小野郷村で降ろし、お寺で教理を教えて貰ひました。普通は二人で教えることになつていましたが、どうしたことか一人来なかつたので、その日洗礼を受けたM青年が一人で、その晩、初めて教理を教えることになつたのです。その後は

ずっと金曜日毎に、その青年はその寺の中で教理を教え、何人かの人々が後に洗礼を受けました。それから間もなくその青年は、神学校に行つて神文になりました。教理を学んでも他人に教えないと、なかなか心に沈みこみません。私は、その為にいつも新しい信者に、出来ただけ教理を教えてました。

このMさんがある日私の所に来て、「私の大学に自殺を考えている金持の一人の青年がいます。この方はおそらく自殺するでしょう。神文さん、お話をしてくれませんか」と願いました。私は、お話をうその方に仕事をさせる方がいいと思い、「土曜日にその方を連れて来てくませんか」と言いました。そこでMさんは土曜日にその方をつれて来ました。土曜日には教会で貪りの方達に、色々の物を上げていましたが、おじいさん、おばあさん、歩けない方、そういう方が大勢来られました。私はそな金持の大学生にも少し手伝いやせました。ずっと三時間ばかり手伝いましたが、青年は全く変わった人間となり、朗らかな人間となりました。それはお詫よりよかったです。自分より気の毒な人間がいるとはじめてわかり、大き

度喜んで帰りました。

辛いな故障のわけ

ある土曜日の晩のことです。私共は八幡と田辺と精華町の三ヶ所巡回所に行つて教理を教えることになつて、ました。田辺に一ヶ所、八幡に一ヶ所、精華町に一ヶ所、三ヶ所ですから大きな自動車に沢山の人を乗せて行くことになつていました。私の自動車を整備する一さんは本当にすばらしい自動車整備工でした。専向家です。私がその晩の六時に、その人数を乗せて布教に出かけることは一さんはよく知つていました。いつも三台を整備しましたが、その晩出発しようとして、その自動車はどうした事か、エンジンが全然かかりません。私は不思議に思い一さんにきいたら一さんは、「わかりません。かかる筈です。悪いところは全然ありません」に、「わけがわかりません」と言いました。そこで人数を減らして、少しひじーに私をさせて六人乗りました。そして八幡町に一人降ろし、

それから田辺町に二、三人降ろして精華町に向かいましたが、田辺から精華町の中间ぐらいの所で、その時道が悪く、二つの大きなトラックが泥道にしまっていました。私の自動車は幸いに中が狭うで、やつと通れました。もしあの動けなかつた大きい自動車で行つていたら通れませんでした。その時、精華町に行くことになつていた〇ちゃんは、小さい自動車でグズく言つていましたが、「神父さん、わかりました!」と言いました。「私はこれから自動車が無い時、絶対怒りません。神様は私より賢いです。もしあの大ない自動車に乗つてたら、精華町に行けませんでした。神様は本当に賢い! 私共が精華町に行くのを望んでいましたから」と。

福井の大震災

昭和二十三年六月末の夕方、福井は大震災がありました。京都市内にもかなりひどいでしたが、福井はすっかりこれてしまつて、火事で死亡者も非常に多く、けがをした人もおりました。鉄道も不通になつて、食糧品も足りないという話をき、きました。

Tさんとソウ新聞記者が私のところに来て、「福井は大変困っています。神父さんも応援に行きませんか」とすすめました。私は一人で行つてもあまり手伝うことがあまないと思つて、その晩一晩よく考えましたが、どうしても行つた方がよい、と思い、バロン神父さんの大きい車を借り、お医者さんのH先生と、ヴィンセンセン才会員のHさんを乗せて福井に出発しました。

自動車に沢山な薬と少しひの食糧と古着も一杯のせたのですが、福井の人口は何方もおりますから、そんなど大した助けにならまいと思いましたが、それで

も行きました。

福井に着いたら、すぐカトリック教会に参りましたが、教会は傾いていましたが、建っていました。神父さんは私を見てあまり喜びませんでした。なぜかというと、司祭館も教会もつぶれ、又食物もないのです。「私はしばらくの間、手伝いたい」と言つたら大変に配られました。そこで私は、「食糧品は自分の分を持って来ましたし、寝るのも二人は自動車の中で寝ることが出来ます」と言いました。その晩、Hさんは私は自動車の中に寝て、H先生は途中、少し車酔いしたので気分が悪く、司祭館に寝みました。

次の朝からH先生とその神父さんは無料診療を始め、大勢の人かけがして、から、沢山な人が助かりました。その後に私は聖公会の牧師さんと一緒に、福井県の各村を回ってジヤガ芋をお願いしました。ちょうどジヤガ芋のとれる時でした。

私は村に入ったら、すぐに役場に行き、村長さんにお願ひすることになりましたが、はじめの村に行ったら、「今日は村長さんはお留守です。郡内の一つの村に集ま

り、村長会議があるから、そこに行つたら皆に会えりでしよう」とのことでした。
 そこで牧師さんと私とはそこに行きましめたが、ちょうど村長会議の最中でした。福
 井市は地震で大損害を受けましたが、福井市外は損害があつても、比較になり
 ませんでした。それで村長さん達は私共の願いに応じて、各村から“ジャガ芋”一車を
 福井市に送る約束をしました。自分たちの村の自動車で運ぶ約束をなさうたんで
 す。

福井市には七つの屯がありました。それで私共は各区に同じ日ではなく順番に“ジャガ
 芋”を区民に配給することに決めました。それを配給するには沢山の手伝い人がいり
 ますので、京都に帰ってきてから、ワインセンシオ会員に呼びかけましたら、すぐに十数
 人の方が応援に参りましたよと約束し、トラックで福井に行きました。カトリック
 のお医者さんは四、五人交代に行きました。一人一人のお医者さんは、一二日しか
 泊りませんが、ずっと福井の神父さんと一緒に無料診療をやっていま
 した。他のワインセンシオ会員は進駐軍から大きなテントを借りて、教会の近くの空き

地でテントの生活をしました。

約三週間との仕事を続けまーたら鉄道も直り、路も通れるようになったので、方々から救援物資も送つて来て、私共ヴィンセンシオ会の方の必要も無くなりました。農村から、ミオジヤガ芋を福井市内に運ぶ時には、私共の方でミヤガ芋をとどけるべき場所と時間をきめなければなりませんでした。しかし地震の為に電話は全部こわれて、警察署の電話だけ直つていました。幸いに警察の方も、ミオ農村から警察署に連絡一たら、警察署から私共、ヴィンセンシオ会の方に連絡してくれました。その為に三万貫のミヤガ芋が福井の人々に配給されました。福井市内の人々は皆、少くとも一貫目位いなだりたと思ひます。全然食糧品の無い時、地震のすぐ後でしたから、一番ありがたい時でした。

福井の教会の神父さんは、ちょうど地震が起つた日に、自分の会の管区長ともう一人の神父さんも福井に来つて、福井市は布教してもあまり効果が無いから、

福井の教会を閉鎖して敦賀の方に移すことに決めました。地震の起る直前に

その事を決定して、一時間もたたない中に地震が起りましたから、自分達の決定した事は神様の御意と思い、福井をやめ、引上げる決心をしていましたが、私共ヴァンセンシオ会員とお医者さん二三十人の方が、救済の仕事をしてから、教会は案外に忙やかになり、神父さんの予定は変り、教会はつづきました。

福井から帰ってきて時、雨が降っていました。沢山な人がトラックに乗っていましたが、トラックには^{ガガ}覆がありませんでした。しかし、雨が降っていこうに、トラックの走るところにはチーも雨が降りませんでした。不思議に思いました。神様が喜んでおられることを皆に知らせたかったのです。



陶器の寄附

87 陶器の寄附

ある日、Nさんと私は、組合と同ってお願ひしました。肉屋、かまぼこ屋、下駄の組合（一人の下駄屋は五千足寄附しました）陶器屋に行きましたら、「ソラモ組合長はいませんか」ときいたら、「いません」と言いました。「それなら次の方はいませんか」ときくと、「いません」と言いました。「三番目の方は?」と言うと、「私です」と言いました。私は三条教会で食事の家族に色々の物を援助していますが、陶器に不足していらっしゃる家族があると思います。もし陶器を少しいただけたら喜ぶと思います」と言うと、その方は私の話をさえ切つて、「その話をする必要はありません。私のズボンを見て下さい」と言うので見ると、割合ヨリズボンをはっていました。「実は、私は満州国の学校の校長をしていましたが、戦争が終ったので、引上げて京都に来ました。私の十才になる子供が教会に行き、「神父さん、私のお父さんはズボンが無いから、ズボンを下さい」と言つたら、上等な

ズボンを頂きました。これがさうズボンです」と。そり方は大へん喜び、「今度私は必ず沢山の陶器を探します」と言いましたが、三日位かかつて陶器屋をさがし、沢山の陶器の各組合を回って、三日間その仕事ばかりしましたが、沢山の陶器がありまつたから、三つの土曜日かかつて貧しい家族に、その陶器を差し上げました。

炭の寄附

ある日三条教会の庭に大きなかつらが入つて来て、一番上等な炭が百俵乗つてしましました。運転手は荷物を降ろしましたが、私共は荷物がどこから来たかわかりませんでした。それから二、三日経つて電話がかかつて来ました。寺町の中国人から、「先日私は炭を少し送らせてましたが、どうしましたか?」Nさんが「炭は来ましたが、どうからわかりません。あなたはどうなたですか?」と尋ねると、教会すぐ近くに住んでいました。二、三日してNさんと私はコーヒの会話をもつてお礼に行きました。その方は、「私は前からあなたの仕事を見て、どうしても手伝いたい。又送ります」と

おっしゃいましたが、又もう一度炭を百俵送って下さいました。

大阪のお手伝い

89 大阪のお手伝い

田口司教様が大阪でも同じ救済事業をしたいと言われましたので、私は行つて、「先ず救済切符を作り役所に行き、民生委員に貧しい家族に配つてもらつて下さい」と言いました。京都と大阪の生活困窮者とは殆んど同じ位でした。私は「救済物資を集める為に、手伝います」と約束し、翌日ジープで大阪に行き、フェヌル神父さんと前田神父さんともう一人平信者の方をジープに乗せて、一日中回りました。大きな組合を回り一日で約束していただきました。大阪は二週間に一度、救済物資を貰へる人に差上げましたので、私は二週間に一度必ず大阪に行きました。そして三ヶ月位手伝いましたが、もう大阪の方だけで出来るようになつたので、古屋司教様が、私が大阪に行くのを止められたので行かなくなりましたが、大阪での事業は

続きました。

私は、先に切符を配って招待し、それから配給ーましたが、大阪の方では、「それは反対だ。もし呂物がなかつたら大変だ。呂物の約束をしてから招待しましよう」と言いましたが私は、「駄目です。先に切符を配らなければなりません。これは神様御自身の仕事ですから心配はいりません」と言って、その通りしました。いつも十分になりました。

残つた物は、つも病院や孤児院にあげました。皆不思議に思つましたが、私も不思議でした。



自転車泥棒

自転車泥棒

91

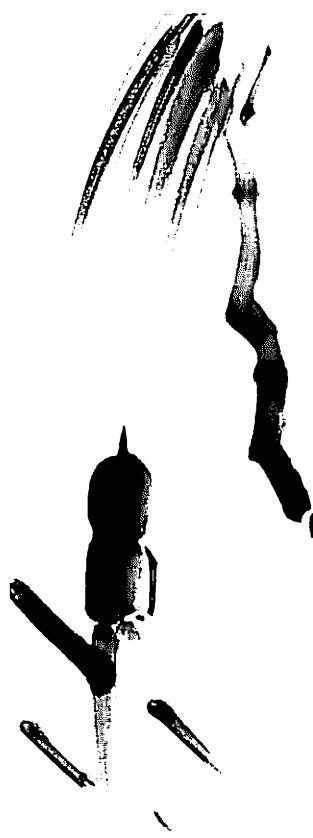
京都にいた時、終戦直後の事でしたが、私の自動車の整備をする方が、遠い所から教会に来ておりましたから、私は自転車を一台貸してあげました。それから間もなく、その自転車は盗まれました。私は早速MPの本部に電話をかけてそのことを伝えますと、MPの本部は日本の警察署に知らせました。警察署は早速京都府の泥棒の王様にその事を知らせましたら、王様はすぐ自分の部下に尋ねました。すると、やはり部下の一人が、その自転車をもつていました。王様は早速教会の方に返すように言いましたから、その自転車は無事に返されました。

泥棒さんは、「私はこの自転車が教会のものだ」と「う」と知りませんでした」とお詫びしました。

私は土曜日毎に教会で、生活保護手帳をもたない五、六十人の浮浪者の方に援助していましたが、その泥棒さんたちも、いつも来ていて、私がいつもよい

行いをしているのを知っていました。教会の救済物資は伝道館に入れてありました
 が、ドアはいつも開けていました。鍵カギをかけた事はありませんでしたが、物を
 盜む方はありませんでした。おそらく泥棒の王様は、絶対私たちの物を盗むなと
 いう命令を下したと思います。

もし私は自分の持ち物を持たない方にわけ与えましたら、盗まれる事
 はあまりないと私は思います。神様はちゃんと守つて下さるからです。



信頼（その二）

ある土曜日に、中央市場の魚屋さんが、魚を千二百せ帶の困窮者の為に寄附することになりました。沢山な魚を約束した人です。

ところが土曜日の朝、私共がとりに行こうとした時、電話がかかり、寄附することになりました。しかし、千二百せ帶の方は、午後に来る事になりました。他に野菜や味噌、漬物など五種類のものをあげていただきましたが、一番喜ぶのは魚でした。

しかし土曜日に魚がないと、残念に思い、その会社は寄附する約束をしたのに、どうやらわざで約束を違えたか不思議に思い、私は三条の教会の聖堂に入り、よく祈り、絆明し、聖ヨゼフにも文句言って、これはきっと聖ヴィンセンティオ会の誰かがいけないことをしたのでしよう、あんな寄附が出来

なくなったことは、きっと理由がある筈だと皆を呼び集め、「今日、魚を寄附していただくことになつていたのに、急に断わりの電話がありましたが、何か私共に悪いことがあつたでしょうか? 私には気がかりがありませんが、一寸証明していただきたい。」と申しました。

するとH君が、「実はナシ魚があります」と言いました。

「どこにありますか?」とききますと、小さな部屋の中に雑魚が沢山ありました。私はかながね皆に申しておりました。「魚はいつも余りせりはいけない。最後に余るようだつたら、後の人には沢山余分にあげるよ」と。しかしH君はそれを受けず、私に黙つて次の土曜日の為にと思って、小さな部屋に入れておられたのでした。私はそれを見て「そのために神様は下さらなかつた」と早速H君を叱りました。「先週ちょっとケチをしたから今週もやわなかつた。今度からちゃんとあげて下さい。そしたら来週も貰えますから」と言いました。

不思議なお魚代

95 不思議なお魚代

ある土曜日の午後、一人の未信者の進駐軍の兵隊が教会に来て、「ちょうど神父さんに相談したいことがある」とのこと、フェルセツカーレ神父さんに会いました。この方の問題は「前晚トランプをして大分お金が当りましたが、自分はこのお金は要りませんから、三条の教会に沢山貢して人が立つていろから、このお金と貢しにあげたいが、どういうふうにしたらよいか」ということでした。そこでフェルセツカーレ神父さんは「今日スタイルバウム神父が、大勢の方の為に魚を買ったが、お金がないので教会のお金を使つたが、返さねばならない。その為にそのお金を使つてよいか」と言つて、調べましたうちもとそのお魚代だけありました。私はあつたにお金を借りませんでした。その日だけお金がなくて、フェルセツカーレ神父さんに借りましたが、そのお金をすぐ返すことが出来ました。

その日はようやく自分で兵舎に帰りましたが、又二・三日たつてから沢山お金ももつて来ました。そして「又当たら食へ人の為に使います」と神父さんに約束しましたが、次から次に当りました。

魚をもらひ人も、私共も喜びましたが、本当に不思議なことでした。私は一や人もお金に不足したことありませんでした。

又有る日、沢山お金が入つて、お手紙をいたさきましたが、次のようないとが書りてあります。

『実は自分の妻はどうしたわけか心が覆り、離婚しようと思つてしまひた。ちゃんと手続きをし、弁護士も頼みました。しかし自分も妻も子供も信者です。自分は社会的地位もあり、そんなことになれば不名誉でありますし、又妻とも長年間一緒に暮して来たのに、こんなになり近いうちに裁判になります。離婚すれば自分も妻に毎月生活費を送らねばならぬ

い。裁判してお金を弁護士の為に使了より、神様に差上げの方がよいと思ふ、銀行に預けておるお金を全部引出しね。どうかこうお金を貯めへの為に使って下さい。』とソナ願ひの手紙でした。

そこで私は早速、貯めの家族達の為に毎週お魚を買いまして、恩人からソナだりたお金を二、三週間のうちに使ってしまいました。不思議にそのお金を使つてしまつた頃、又そメ恩人の方からお手紙が来て、『私の妻は全く変つた人間となりました。今迄は殆んど毎日のように氣嫌が悪くて、本当に夫の家庭生活をしていましたが、今度は急に性質が變つて、離婚の手続きも取り消し、全く結婚した時のように朗らかな妻となりました。』とソナことでした。

数年後、私は病氣の為帰国した時、そメ恩人の家に立ち寄りましたが、そメ家族はまことに円満に暮らしておりました。

神様にお願いがありまーたら、貯めの人々に施せば、されば神様に差

し上げると全く同じことで、神様はそろそろ方に来て、義理をもつようになります。そしてそり方が神様にお願いすれば、神様は速やかにきて下さるわけです。



寄附の魚

終戦後のことです。京都の中央市場に大きな魚屋は五・六軒しかありませんでした。この五・六軒の魚屋さんは必ず一年に一度、京都の貪い家族の為に魚を寄附して下さいました。その場合、ある会社は自分の魚をトラックに載せ、二、三人の社員もトラックに乗って、三条の教会に来て、ヴィンセント会員と一緒に、寄附した魚を配給して下さいました。

また他の荷物を手にしていろ方も大分ありますから、魚をいただいた時、魚はすぐ
落してしまいます。するとその社長さんは又その魚を拾い、新聞紙に包み
又そのおじさんやおばあさんに差上げ、三時間ばかり皆が帰ってしまうまで働いて
おられました。この社長さんは、ふだんは事務所にて、そういう仕事は全然し
たことがありませんでしたが、ずっと最後まで魚が無くなってしまうまで頑張つておられまーた。

皆が帰るしまってからその社長さんは、「私は生れてから今まで、こんな喜び
を感じたことがありません。」とおっしゃつたのです。

それからは必ず一年に一度、魚を同じくらい寄附して下さいました。やはり
貪りの方に物を差上げる時は、イエズス様があつしやつた通り、それは神様に差
上げると同じ事です。社長さんがお喜びになつたのは当り前の事だったと私は
思います。

青果会社の社長さん

私はいつも普通は農村に呼びかけていました。百五十町村に呼びかけ、はず一年に一回、各農家から一貫目ぐらの野菜をお願いしてきました。土曜日毎に平均して、三つの村から野菜を寄附していただきたのです。しかし、たまに雨が降った為か、或は他の事情で、ある村はきつまた日に野菜を約束したのに、守ることが出来なくなりました。そういう場合は、私共はいつも中央市場の一一番大きな青果会社の社長さんにその事を説明したら、社長さんは惜しげもなく、野菜を一車（八百貫位）を寄附して下さいました。何回もその方にお願ひーたことがありますが、それから私が京都を離れてから十数年間、私はその社長さんに会うことがありませんでした。

その後私は神の園老人ホームを建てる為、街頭募金をし始めましたが、中央市場にも行う。例の社長さんにお目にかかりました。まだ元気でした。そこで昔の話

をして私は尋ねました。「社長さんは何回も貪りの為、野菜を寄附したことありますか、その為に大へん損をしたと思いませんか?」と申しましたら社長さんは、「私は損を一回のじやありません。かえってその為に成功しました。」と言つて大へん喜んでおられました。それからその社長さんは寄附金を約束し、そればかりでなく、中央市場の皆々も寄附させますとおっしゃったのです。大分沢山の寄附金をいただきました。

その社長さんは、神様を信じて、貪りの人に物を上げることは、神様を喜ばず、などと信じていました。



魚の薬

メリールのシスター達は、韓國の釜山で病院を經營していましたが、北朝鮮軍が襲撃して来たので、急いで京都に逃げて来ました。私はそのシスター達を自動車に乗せ、薬もりせ・八幡、城陽町、小野郷、山科など方々で無料診料をいたしました。

山科の公民館である日、數十の方にお薬を上げたことがありましたが、京都に帰ると、「もう釜山に帰つてもよい」とのマッカーサー元帥から知らせがありましたので、シスター達は早速、釜山の病院に帰りました。

その後の日でしたか山科から、一人の十八才位の青年が私の所に来て、「私の近所の一人のおばあさんは、この間シスター達から虫下しの薬をもらつて飲んだが、身体中に吹出物が出て本当に困つています。おばあさんは大変怒つていますから、すぐお医者に来てもらいたい」とのことでした。しかしシスター達はもう帰られてしまふ

私も薬のことは何も知らないので、その青年に魚の缶詰を「上げ、下せを。おばあちゃんに差上げて慰めを下さい」と言いました。缶詰には「魚」と書いてあり、魚の絵が書りてありました。

青年はそのとおりしました。しかしその缶詰をおばあちゃんに差上げた時、何も言わず渡したので、おばあちゃんはそれを薬と思い、その魚を身体中につけました。半分位つけてしまいましたが、翌日になつて身体中の吹出物は、きれいに治りました。油の関係か奇跡かわかりませんが、とにかく、きれいに完全に治つたのです。それでおばあちゃんは大へん喜んで、今度おじいさんと一緒にキリスト信者になりたいと言つて、すると、その青年が伝えました。

二・三日たつてから私はその家に参りましたら、おじいさんとおばあちゃんは大へん喜んでいましたが、その魚の缶詰はまだ半分残っていましたから、私は、「もうこれはいりませんから食べたらよろしい」と言いました。

その家には仏壇があり、位牌だけがありました。私は仏壇の中にイエス様の

105 魚の藻



掛軸を飾り、両側に位碑をそのままおひて、みどりのスカブリオをおじいやへとおはあやにあげ、「こゝの祈りを唱えなさい」とすすめました。

それから二・三日して私は急に青谷教会に転任することになり、そゝ家に行けなくなりました。

くさ頭の子供

朝鮮動乱の時、しばらくの間、メリノールのニスターが八幡の役所で無料診療していた時、沢山の人々が来ていました。ソイズと云う一人の婦人が、一才位の赤ん坊をつれて来ました。クサが頭全体に出来て、帽子をかぶっていました。以前に色々のお医者さんに見てもらいや、ペニシリン注射もしてもらいましたが、少しも治りません。医者のニスターは私に向きました。「お湯にタオルを入れ、子供の頭にのせ、一二時間位してそのカサを取つてしまつてから薬をつけます。そしたら二、三日の中には、この子供は治ります。又散髪をしなければなりませんが、勿論クサを取つてから散髪します」と言いました。

私は早速言われた通りましたが、子供は大泣きしました。いくら泣いてもさうして、私はその子だけにかかりました。その後何十人の人が来て治療してもらいましたが、やっとカサが取れたので、その子の頭を散髪したら、血だらけにな

りました。それから薬をつけ、包帯をしました。翌日も又来て薬をつけてましたが、二、三日うちにすっかり治り、その子のお母さんはとても喜びました。

私がYちゃんとどその子の世話をしましたが、次の土曜日、Yちゃんの家に行きました。「私の家で教理を教えててもよい」と言いましたので、Yちゃんが行つて教理を教えることになりましたが、だんだん聞く人が増え、終にその家の二階に祭壇を設けて教会として使いました。

八幡の教会は、そりようにして始まつたのです。



かずお君の建てた障害児施設

かずお君は十二才の子供でした。小さい時から手も足も頭も、全然動かすことが出来ませんでした。しかし幸いに、非常に親切なお父さんと、お母さんがありました。お姉さん一人ありました。お姉さんは身体障害者で、施設に入っていました。そして治療して大分よくなりましたが、かずお君の為には、かずお君を収容する施設は全国にありませんでした。なぜかというと、かずお君は全然治る見込みがなかつたからです。幸いにお母さんはよく面倒を見て下さいました。

松阪の老人ホームのすぐ近くに住んでいましたが、老人ホームのレスター達が同情して、毎週火曜日に、かずお君を守りをして下さったので、その間お母さんは自由になりました。買物に行ったりして大変助かりました。お母さんは大変喜んでいて、かずお君を日曜日毎に、乳母車に乗せて教会につれて来ました。

ある日曜日、かずお君が教会に来た時、大変身体の調子が悪いようでしたから、

10.9 かずお君の建てた障害児施設

サーン神父さんが洗礼を受け下さいました。その後にお母さんも神様のお話を聴きたいとおっしゃったから、教会の伝道婦さんは毎週かずお君の家に行って教理を教えてました。その時かずお君もおばに寝ていて、その神様の御教えの解説を聞いていました。そして、非常に頭のよい子でしたからよくわかりました。

お母さんが洗礼を受けたからは二人で教会に来るようになります、信仰生活を一年間位つづけましたが、かずお君は又病気が重くなつて、あまり助かる見込みがないので、市民病院に入院しました。危篤の時に私は御聖体と病者の歎跡を授けに行きました。歎跡を受けてから、かずお君は、私に話すことがあるとお母さんに言いました。私は全然かずお君の話がわかりませんでした。私はかりでなく、他の人もわかりません。口が殆んど動きませんから。しかしお母さんはよくわかりました。かずお君の願いはこうでした。「神父さん、私はもうすぐ死んで天国に行きます。天国に行つてから、私はすぐにマリア様にご願いするつもりです。そのお願いは神父さんが、私のような子供の為に、一つの施設を立てていただきたいと、うことです。私にはどうぞ施

設は要りませんでした。幸いに私は非常に親切な父母がありましたから。しかしおそらくこの国には、私のような子供が沢山いるでしょう。お父さん、お母さんがあっても忙しかったり、あるいは、私のようなお母さんを持たない子もいると思います。そのため一つの施設がほしいと私は思っています。マリア様にすぐにお願ひするつもりですから、神父さん、どうか勇気を出して、早くその施設を建てて下さい」と言いました。

それから二、三日後かずか君は安らかに亡くなりました。お葬式は教会でしましたが、一杯人が集つたので私は驚きました。

何日か経つてK伝道士さんと私は県庁に行きました。用件は、もう一つの老人ホームを建てる事について相談するつもりでした。係り方に特別養護老人ホームの話をしましたら係り方は、「それは本当に計画ですが、もう一つの老人ホームを建てるよりも急ぐ仕事があります。その仕事は、二重障害の子供の世話の施設です。もう一つ施設は、全国には一つもありません。」と言われました。そこで私は、「かずか君のことを思い出しました。」ああ、やはかずか君のお祈りの為、やないか、と思いま

した。ええ係の方は、是非ともどうう子供の方に、先に手を伸ばして下さいと言
われたが、私はそな方がよくないかと思ふ、「もう一ぺん考えやしてんだ」とから又参
ります」と約束しました。

それからかずお君のお父さんと会い、その事について相談したら、お父さんも信者では
ありませんが、最も熱心に協力して下さいました。すぐにプランを立て、どれ位の大さき
の施設を建てるか、幾人の子供を収容するか、どれ位のお金がかからか予算を作り、そ
して新聞記者会を開きました。各新聞者の方が教会に来て、伝道士とかずお君の
お父さんと、もう一人の信者と私と、六・七人の新聞記者の方も来て、一緒に簡単に
夕食しました。そしてよくとの計画と説明し、又かずお君の話もしましたら、新聞記
者達は皆どの次の日に、大きな記事を新聞にさせました。

一番面白いところは、かずお君のことでした。“教会の神父が、どうしてもかずお君の
願いに応じてその施設を建てたい”と書きました。

それから二・三日たつて、ある東海テレビの代表者が来て、「新聞記事を読みました

が、その事を「ドラマにしない」と言わぬま一た。ドラマにするには大分お金がかかります。

そこで日本全国に放送しまーたが、方々から寄附金を送つて来ました。又、かずお君のお父さんも奔走して、自転車振興会にお願いしましたら、既に二十箇所の設設から振興会に申請が出されていました。私共の方が一番先に助成金をいたしました。又、沢山な方が手伝つて街頭募金もしましたが、案外早く、かずお君の希望通りに施設が出来ました。

場所は三重県松阪の近くの三雲村と云う村の近くにあります。村の人も非常によく協力して、ラレスラ会のシステムを中心、六十数人のかずお君と同じような子供のせ話をしています。

考えてみまーたら、かずお君は少ーも身体が動きませんのに、話も普通の人と話が出来ませんのに、又お金も無いのに、十二歳で死んだ子供が、あの立派な施設を建てる事が出来ました。かずお君のお祈りは非常に力がありました。全能

なる神様におすがりした為、可弱い身体障害児が、元気な人よりもすばらしい仕事をすくつたのです。

113 かずお君の建てた障害児施設

何年か経つて私は胸の病氣にかかりました。神戸の海星病院に入院して、レントゲンをとり診断していただきながら、片肺の半分ぐらい切除した方がよいと先生から言われました。そこで血の検査をして輸血の準備をしました。手術は約三時間かかりますし、相当の血が必要ですが、私の血は珍らしい血でした。ようやく一人の「ブラザーハンク」下さる約束をしました。あと二・三日で手術することになりましたが、私は一寸不安な心が起きました。手術をすれば、肺が治つても心臓が弱るし、又、長らく養生しなければならず、仕事が出来なくなります。もし神様に治していただけば手術しなくても済むと思いました。しかし神様にお願いする時は一人でお願いするより、かずお君と一緒にお願ひしようと思ふ。毎日「かずお君お願ひします。かずお君お願ひします」と、ただそれだけ何回も祈りました。

そろそろうちに以前から知り合の外科医のK先生に電話して、「一度海星病院に来て、私のレントゲン写真を見て、手術しない方がよいか、しない方がよいか、先生の御意見をききたい」とお願いしました。K先生はすぐ翌日、自動車で来て下さいました。そしてその結果は延ばした方がよいということでした。

それで私は自上から「手術せずにアメリカの本部に帰ります」と言われ、ニューヨークに行きました。ニューヨークで又診察して「まだいたところ、『もう病気は大体治つていい、肺には悪いところはない』とのことでした。

それで私は半年位養生して日本に帰り、宇治教会に赴任しました。
その後はずっと健康体です。



老夫婦とスカラリオ

はじめて松阪に行つた日のことでした。私は青谷教会と司牧していた時、病気を治す為に目上の命令によつて一ぺん帰国したことがあります。一年半ぐらい養生したら大分よくなつて日本へ帰りました。ところど三重県の松阪に行つて新しい教会を始めなさい」と言われました。古い病院を目上の方が既に買って教会にする為になおしたりしていましが、まだそこには住むことができないため、私は津市の教会に一、二ヶ月間ござつかいになることになりました。

三重県に行き、一晩津市の教会に泊まって、次の日にはじめて一人で松阪にまいりました。教会の敷地をすぐに見つけて、しばらく大工さん達とお話をしながら、どうでも少し布教の話をしたいと思って、教会の敷地の隣りの家にちょっと寄りました。その家は古ぼこ屋でしたが、おじい

さんとおばあさんとが住んでいました。私は自己紹介して、「もうしばら
くしたら、ここ隣りの敷地でカトリック教会をはじめた『モリタ』と
説明しました。おじいさんはおばあさんはたのん親切な方でした。

その時、私はひとりのスカラリオを二人にさしあげて、簡単にマリア
さまの話をいたしました。二人はよろこんでそのスカラリオを受取って、
しかしスカラリオのお祈りはなかなかおぼえにくいでした。

後に私が教会に移つて来てから、時々その家を訪問しましたが、おば
あさんの方は関節炎にかかりていました。手も足も非常に腫れてい
ました。「時々教会に来て下さい」と私はすすめましたが、おばあ
さんは、「私はとても冬の間歩けません。足がいいですから」と
言つていつも寝ていました。そこで私は「マリアさまのスカラリオを
どの痛みところに当てて『マリアさま、よろしくお願ひします』とこれ
だけおつしやつたら、マリアさまは何とかして下さるでしょう」とすすめ

ましたら、おばあさんはその通りにしました。そしたら以外に、自分の足も
手も完全に治りまして、その後ずっと死ぬまで、そういう病気にかかりません
でした。長期間、冬の間は骨肉筋炎にかかっていましたのに、マリア様の
お祈りのおかげで治つたんです。そのため、おばあさんは喜んで曰旺日は勿論、
ふだんの日も、ヨミサにあづかるようになりました。そして洗礼を受けながら
あまりにも喜んでいましたから、向うの家のおばあさんにも、マリア様の話をして、
そのおばあさんも教会へ来るようになり、洗礼を受けました。そのおばあさん
は大変弱っていましたが、一、二週間たたないうちに教会へ来られなくなり
自宅で安らかに歿跡を受けてからお七くなりになりました。

その後に、私は度々おじいさんに会って、おじいさんにも洗礼を受け
ようすすめましたが、おじいさんは近くの神社の世話方をしていましたから、
なかなか信者になりそうな方ではありませんでした。しかしスカブーラリオは大事
にしておりました。そのうちに聖体行列がありました。教会から近くの老人

ホームまでイエス様の聖体をもつてゆっくりになりましたが、おじりさんはどうしても天蓋持ちを手伝いたいと言いました。普通はそういう仕事は洗礼を受けた方にさせますが、おじりさんは神社のおみこしの手伝ひをする習慣があつたので、おそらくそのまま天蓋持ちの手伝ひをしようと思つたのです。

そのためにはおじりさんはお恵みと与えられたと思います。とにかく間もなく

おじりさんは重い病気にかかりて、自分から進んで洗礼を申込みました。

洗礼ばかりでなく、聖体も終油も、大へん敬虔な態度で受け、安らかにお亡くなりになりました。みどりのスカーラリオといつも身につけておりましたが、すぐには信者にならなくても、知らず知らずのうちに、聖母のお祈りのおかげで、その老夫婦は救われたと思ひます。

貪るい母の信仰

松阪の教会を始めた時、私は沢山な見本の薬をもっていました。米國から送つて来たものですが、どういうものを人にあげるには、どうしてもお医者さんに来て顶かなければ必要がありました。松阪のある病院の一人のお医者さんは、一週間に一度奉仕する約束をなさいました。いつも土曜日の午後でしたが、診察してから、その薬をただで病人達にさしあげました。皆が診察を受けける前、一部屋に集つて、私と伝道士が神様のお話をしました。またマリア様のスカーフラリオも皆に差上げました。

そのためにはかなり沢山な方が信者となりましたが、一人の本当に貪るいお母さんが私共の無料診療所に来て、病気がちりへんよくなりましたからとても感謝しておりました。そして、「こどもは私の主人の為にお薬をいただきたい」とおっしゃいました。「主人はどういう病気ですか?」と

ききました。「脱腸です」と答えました。そこでお医者さんも私も
 そのお母さんに言いました。「脱腸という病気は、どうしても病院に入
 院して手術しなければなりません。薬で治るものじゃありません」と。
 するとそのお母さんは、「私は貰へて入院するお金はないし、又
 一週間でも主人が休みましたら経済的に大へん困ります。」とおっし
 ゃいました。お金もなし、休む時間もないからどうしたらよいかと私
 にききましたから、「どうぞう場合には、マリア様に奇跡をお願いした
 らよいと想っています。マリヤ様のスカーフアリオを主人に差し上げて、毎日あ
 なたと主人と五人の子供も一緒に、お父さんが治るようになります」と
 すすめました。そのお母さんは、「どう通りにします」とおっしゃつたので
 すが、次の日、そのお母さんは教会に来て、「私の主人はマリア様のスカーフ
 アリオを受け取りました。いらっしゃいと言います。どうしたらよろしいか?」と
 尋ねましたので、私は「お主人がお祈りすれば一番よろしいが、お主人が

121 貪しい母の信仰

治らなリと、あなたも あなたの子供達も困るから、このスカラリオを壁にかけ、子供達と一緒に熱心にお母さんの脱腸が治るよう祈って下さい。」とすすめました。

そのお母さんはまだ洗礼を受けていませんが、従順に私の言うとおり祈りましたところ、その主人の病気はきれいに治りました。

間もなくお母さんとその子供達は洗礼を受けましたが、主人はないが洗礼を受けませんでした。

お母さんは非常に喜んで、隣り近所の人々に、自分の主人が奇跡的に癒されたことを伝えましたので、近所の人も教会に来るようになります。どれほど多くの人が救われたかわかりません。

私は、いつまでもあの貪しいお母さんの信仰ぶりが忘れられません。

ほほえみ

松阪におりました時、五人だけの信者がいました。四人は女子の方で、一人は男子でした。その五人のうちの三人は肺病にかかっていました。その中の一人は大へん重症でした。その名は大戸和子さんと言って、警察の方のお嬢さんでした。本当に信心深い娘で、私は度々病院にお見舞に行つて御聖体を授けたりしましたが、ある朝の四時に、入院していろ元気な未信者の患者が私を呼びに来ました。和子さんは、その晩死ぬんだろうと思つて、御聖体を預きたいから私に来てほしいという願いでしたから、私はすぐ病院に参りました。

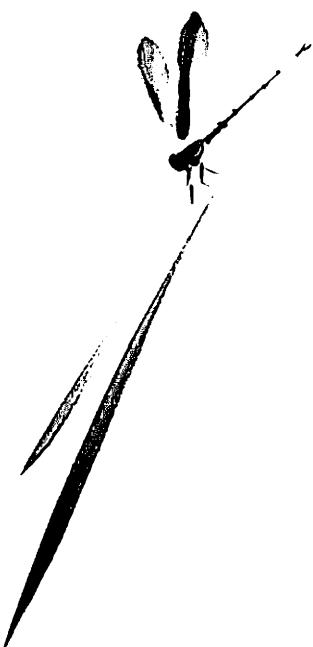
御聖体を授けたから和子さんは、「神父さま、しばらくの間私のベットのそばに腰かけて、天国のお話ををして下さい。私は向もなく天国に行くと聞っています。」そういふ願いでした。私はさうとおり三十分ばかりお話をしました。

しかし和子さんは少し回復して、次の日もまだ生きておられました。三日間ばかりもちましたが、三日目に、一人の小文さんがベットのそばに腰かけたと、和子さんは枕を二つ背中に当て、上体を斜めに起こした姿勢で胸に十字架を抱いていましたが、少し目をひらりて、「イエズス！ マリア！ テレジア！」と言つて、それから安らかに最後の息を引とりました。

私はふだんから和子さんに申していました。「あなたは間もなく神様の美い天国に行きますが、天国に行つたら必ず、自分のお父さん、お母さんご兄弟のために祈つて下さい。お父さん、お母さん、兄弟が必ず天国に行けるように。」とすすめましたら和子さんは「はずどうします」と固く約束し、ずっとその心をもち下りお亡くなりになつたのですが、亡くなつてから不思議にも、和子さんの顔はちよつと微笑んでいました。その微笑は死後も残りました。あまりにも不思議なことでしたから、お父さんは早速写真屋を呼び、自分の死んだ娘の顔を写していただきました。

お葬式はカトリックの葬式でしたが、終りましてからお父さんもお母さんも、一緒に住んでいた姉さんも、姉さんの子供達も皆、洗礼を受けられました。私はその後、度々大戸さんの家を訪向しましたが、和子さんの死んでからの写真は、いつも祭壇に飾ってありました。大きな写真でした。

家族揃つて毎日和子さんの笑顔を見ながら祈りを捧げていましたが、早かれおそれかれ天国で和子さんと会うことが出来ると信じています。



松阪教会の設立

私が松阪に行つた時、教会はありませんでした。一人の私の同級生の神父が寄附したりと言いましたが私は断わりました。松阪には五人の信者しかいません。その中二、三人は病気で寝ていて教会に来ませんし、信者のない所に教会を建てても勿体ないと断わりを出しました。「今は古い假教会で、当分の間信者が増えるまで教会を建てつもりでない」とその神父に言いました。

その後その神父から少しあ便りがありました。そろそくに信者が二百人ぐらい増えました。そこで假教会は不適当になつたので、例の神父に又、手紙を出しました。「今度は私はどうしても教会を建てねばなりませんが、又この前約束した寄附があつたら、教会を建てながら送つて下さい」と頼みましたところ、間もなくその神父から手紙をいただきました。「寄附いたします場合、あなたに直接送つ方がよいか、又はメリノールの本部を通して送つ方がよいか

と尋ねて來たので私は、「本部を通じて送って下さい」と言いました。それから「五千ドル本部に送った」とソレ便りが来ました。その後に私共はちゃんと設計と頼んで建てる準備をしていましたが、三ヶ月間待つてみてもそろそろ金はなかなか来ません。それで私は本部に尋ねることにしました。

手紙を書りてポストに入れるとその翌日、本部から知らせがありました。「あなたのお会いを建てる為に一万ドルのお金を送りました。実は、あなたのお友人の神父は、五千ドルぐらいの値打ちの株を私共の方に送つて来ましたが、少し株にくわいい方と相談したら、その株は一寸の間保存し、それからお金にした方がよりだらうとの意見だったので、三ヶ月間待つてみたり売りました。不思議にもその株の値段は倍になりました。その五千ドルのお金は一万ドルとなりました。」とのことでーた。

実は私は、一万六千ドルが必要でしたが、幸いに私の親戚と友人達が少し手伝ってくれたので、松阪教会が出来ました。

例の神父はとても喜びました。その神父は私より年上で、私が始めて神学校

127 松阪教会の設立

に行つた時、私と一緒に行き、同じ部屋に居ました。その神学校は、アメリカで一番古くて、一番大きなか神学校でした。サン・スルビスの神父たちは、フランスの迫害を逃れてアメリカに行き、アメリカで神学校を建てました。私は一年間だけ、その神父と一緒にその神学校で学びました。それから私はメリーランドの神学校に行きましたが、その神父はサン・スルビスの神学校に残り、米国の神父となりました。

私は時々、松阪教会はその神父が寄附したのですから、一度見に来て下さりと手紙ですすめました。何十年も交際してすすめましたら、その神父は体は身し弱かつたが、死なないうちに一ぺん行つてみたいと言つて、姉と一緒になりました。

松阪教会は、フロイラー神父さんは三万ドルの設計をしましたが、そんなんが金がありませんので半分にしてほしいと言いました。三万ドルだつたら鉄筋肋ですが。それなら木造で設計して下さることになり、半分の費用で出来ました。フロイラー神父さんも満足していました。沢山の教会の中で気に入ったのは松阪教会だ

と言っていました。

教会を始めるには、建物より信者を作る事が大功と思ひます。京都にて時、十数つありましたが、ただ借りたところで、公民館、郵便局、安定期、お宮、お寺で教理を教え、ミサを捧げました。青谷では四つの公民館、田原には二つの公民館、宇治田原は三つ位、宇治は技藝学校の二階と個人の家、山科は小山先生の家、又他の裁縫の上手な方の家で、精華町は町長と府会議員の家、大森村はお宮とお寺、中川は公民館、小野郷はお寺でした。尾鷲は、"ファウキン"と云う食堂の大ホールを借りました。



鉄道事故

松阪に赴任しました時、日本にはまだあまり自動車がありませんでした。私はライトバンの自動車をもつていましたが、まだ松阪にあまり信者がいませんから、私は早速、警察署の方に行き、「もし松阪に災難や事故がありましたら、私は喜んで手伝います」と約束しました。松阪にはまだ救急車がありませんでした。私の自動車は救急車として使うことが出来ました。「担架もありますし、昼夜でも夜でも電話下さつたら私は必ず参ります」と約束しました。火事の時、事故の時、又時々汽車中で急病にかかり、松阪駅に降ろした場合、私はいつも迎えに行き、松阪の病院に連れて行きました。

ある日、ひどい事故が松阪の近くに起こりました。三つの電車が衝突して五十人位の人が死にました。電話がかかるたび、私は早速自動車に乗り、その現場に行きました。事故の起こった所まで行くには、狭い道を通りなければなりませんでし

たが、少し危い道でも私は事故の所まで行きますと、既に沢山の死者やけが人が並んで皆寝ていました。私は係の方に、「私の自動車には唯一人だけ乗れます。助かる見込みのある人を一人自動車に入れ、私は病院に連れて行きます」と言つた係の方は、「一人の女学生の片足を早く切断しなければなりません」と申しましたので、私はその娘を乗せ、早速スピードを出して市民病院に連れて行きました。病院も警察から既に知らせを受けたので、早速娘を中心つけてゆき、足を切断しました。そして命が助かりました。

その後に私は又現場に行き、もう一人乗せるつもりでーたが、既に進駐軍の車が一杯入つて、私の自動車は入れなくなりました。

事故の二週間ほど前、松阪の一人の信者の女の方が、自分の親戚の方に信仰上の話をしました。「あなたも神様を信じて罪の赦しを受けたら、いつ死んでも天国に行けるよう準備しておきなさい」と言いましたが、その方は「私はまだ若いから死につけられません。年をとつたらまじめに考えるかも知れないが、今

「こう宗教のことをまじめに考えません」と言いました。しかし二週間の後、その方も事故の為即死しました。やはり間は少しきわめからず、若く人でも死ぬ準備をする必要があります。

葬式なしの老人

松阪におりました時、無料診療を毎週一度していましたが、医者の診察を待つての間に病人達は、伝道士と私の話をいつも聞いていました。私はイエズス様の御教えを説明して洗礼を授かる事をいつもすすめましたが、かなり沢山の方が信仰するようになりました。

毎週来られる方で、六十才くらいの一人のおじいさんがいました。この方は一寸遠い所に住んでいて、一人ぼっちでした。何も仕事をしておられませんでしたから、十分ひまがありました。私はこの方に早く信仰して洗礼を受け、死の準備をしてお

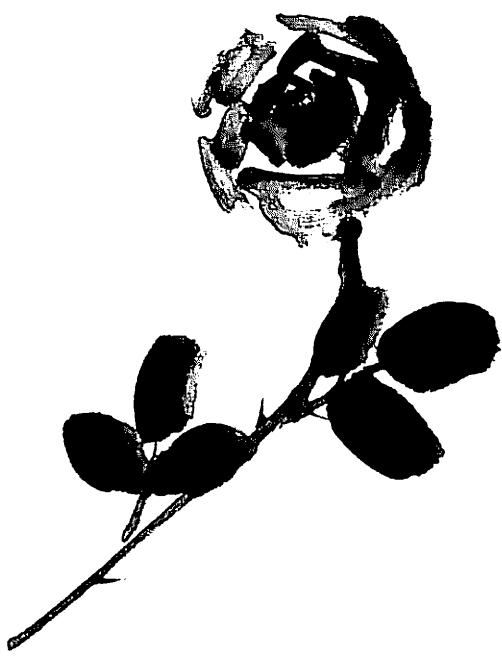
いの方"がよりどりはないかと言いました。この方は病気でーたが、しかし割合元気でした。このおじいさんは、「私はどうしてキリストの洗礼を受けられません」と言いました。その理由は、「私は独りぼっちです。兄がいますが、兄はしつかりした仏教信者です。私が死んだ場合は兄が私の葬式をすることにあります。私がキリスト教に入つたら、私の兄弟は葬式を行ってくれないでしょう」との話でした。私はくわしく説明しました。「お葬式していただかなくても、自分の罪を赦され、極楽に行つたらそれで結構で、葬式が無くてもよい」と。しかしおじいさんは「どうしても葬式してほしい、それで洗礼を受けられない」と。

その話をしながら一週間たたないうちに、伊勢湾台風がありました。台風の時おじいさんの家はくずれてしまつて、おじいさんは下敷となつて死んでしまいました。そこで兄さんはちやんと来てくられましたが、おじいさんは案外沢山のお金を持っていました。兄さんはそのお金を見つり、葬式もしなりそのままほつておき、お金を持ってどこかへ行つてしましました。村人は、おじいさんは全然お金を持たないと思つたのに、そのお

133 葬式なしの老人

じいさんは當然お金がないと言つて村から特別の援助をもらつていました。

二、三月経つとも誰れもおじいさんの死体の後始末をしないので、村人も相談しましたが、やはりいつもお金がないと言ひながら、お金が沢山あつたのに嘘つきだつたので、葬式もしなり、おじいさんの死体を死猫のように、どこかに埋めてしましました。



洗礼を受けた住職

松阪にいた時、毎週一度、私は教会で無料診療をしました。二週間に一度、医者と看護婦、薬剤師と私と伝道士と、ソモニ・六人で無医村に行って一日中診療しました。

ある村に行きた時、お寺で診療しましたが、寺の住職はとても親切でした。その日沢山な方が無料診療していただき、お薬もいただきましたが、その間に伝道士と私は三時間ばかり、そのお寺の住職と話しました。そのお寺さんを私はいつまでも忘れられません。

「自分は、あまり仏教の教えを勉強したことがない。しかし心の中で神を信じていたのです。お坊さんになる時、勿論お経の読み方の練習はした。上手にお経を誦えることが出来た。また礼儀作法を学び、又色々の儀式も学んだが、仏教の教えはそんなに習わなかつた」と話しました。伝道士と私

は、よくイエズス様のみ教えを説明して、一緒にお茶を飲んだりして、本当に楽しい三時間と過しました。そして診療が終つたら教会に帰りましたが、後にその方に、「真理の本源」という本をおとどけました。

それから三年ぐらい経つからのことでした。私は毎週一度ぐらい、近くの市民病院に行って病人さんの見舞をしていましたが、ある日、三人部屋に入ると、一人の新らしい患者が入っていました。それはあのお寺さんでしたが、私は全然その顔を覚えていませんでした。しかし大変重症ですから、私はそのベッドのそばで簡単にイエズス様のみ教えを説明して、「もしあなたは罪を痛悔して、イエズス様の洗礼を受けたいなら、私はすぐに授けます」と言いましたらそいつは、「私は受けたい」と言いました。そこで私は早速小さいテーブルに、十字架とローリングと洗礼の水と、他の必要な物を飾り、洗礼の儀式にとりかかろうとしますと、三十オぐらの婦人が部屋に入つて来ました。その婦人はお寺の娘さんでした。そして私に、「何をつりますか」と尋ねましたので、「洗礼を授けろつも

りです」と答えると、「私の父は仏教のお坊さんですから、キリスト教に入りません。

洗礼を授けることは出来ません」と申しました。「しかしあなたの父さんは、

洗礼を授かりたいと言われました。」そこで娘は早速お父さんに尋ねました。

「あなたは本当にキリストの洗礼を授かりたいですか?」と。するとお父さんは
はつきりと力を入れて、「私はキリストの洗礼を授かりたい」と答えました。娘
は少し驚いた様子で黙っていましたが、私は洗礼を受けました。

洗礼を受けた後、その方は大度嬉しそうな顔をして、「私を見えていません
か?」と尋ねました。そして自分の村の名を言いましたので、私はすぐ思い出し、
あ、あの方か!『真理の本源』を差し上げた方だなあと思えて神様に感謝
しました。

教会に帰つてから、その方の為に祈りを捧げ、また二・三日経つてから御聖体
を授けに行きました。しかし部屋は変つていて仏堂に入つてぶられ、「面会謝
絶」と書さざりましたが、ちよつとドアを開けて「病人に会ひたい」と申しま

したら、例の娘は、ながく承知しません。それで私はそりあ父さんに会わず、神様におまかせて教会に帰りました。

二、三日して亡くなりましたが、葬式にも行こうと思ひ乍ら、「家族の者はあまり喜ばないでしよう」と人から言われたので、その代りサレの香奠をもつて行そりたときました。

後に、その村の一人のカトリック信者の青年から聞きましたが、この住職は本当に感心な評判のよい方で、貪る方がないたらばす板つて下さり、皆から非常に尊敬されていたとのことです。

私はソラガ天国で、そのお寺さんと会えるのを楽しみに待っています。

施しについて

罪をつぐ方法は色々あります。お祈りも勿論しなければなりません。靈的慈善業、肉体的慈善業もあります。皆非常に役に立ちますが、罪を償うのに一番しやすく、又一番確実な方法は、物を施すことだと私は思います。

イエス様が、ザケオと取税人に初めて会った時、「ザケオの心には変わりまーた。ザケオは税吏の仕事をして最も罪の深い方だつたらしいですが、「罪の赦しを受ける為に私の持ち物の半分を施します」と言つたんです。

聖人伝を読みまーたら、自分の持ち物を貪り、人に施して、えらい聖人になった方は沢山あります。聖ペトロは金持ではなかつたようですが、自分の持つていろ物を全部他人にゆずつて、イエス様に従つたと聖書に書けてあります。

「物を貰うよりも物を与えるのが幸いだ」とイエス様がおっしゃいました。

神の園の老人ホームを建てる時に、私は何回も街頭募金といしまして、

度々、色々の方にも手伝つていただいた事もあります。ある方は一ぺんだけ募金の手伝いをして、その後は絶対手伝わなくなりました。調べましたらどういう方は、人から物をいただいた時、その方に迷惑をかけたと思っておりました。私は正反対に、お金と箱に入れて下さいと通りかかる人に申します時、その人によい行いをさせるとモリでした。ちょうど銀行で働く人がお金を人から預る時、少しも恥ずかしくありません。なぜかというと、銀行の方ではそのお金を、いつか利息と一緒に返すつもりですから。又お金を預ける人も安心して、樂しみにそのお金と銀行に預けます。考えてみまつたら神様の銀行は、三井銀行よりも安全です。物を慈善事業に施した時は、神様の銀行に預けたことになります。神様は大金持ですから、私共の物は全然いりません。しかし私共に別な方法で、高い利息も一緒にせずお返し下さいの筈です。普通はこの地上にいても施しをする人は物質的に恵まれます。ですから慈善事業の為に施しを願うことは、決して恥ずかしい事ではなく、神様を喜ばす事と、私は信じ

ます。

松阪にいた時、ザーン神父さんが募金しておられた人です。ちょうど店の前で募金しておらると、一人の小さい子がその店に菓子を買ひに来ました。ザーン神父さんは突然、その子に「お願ひします」と言いました。その子は十円しか持つていませんでした。その子はザーン神父様の箱と菓子を見て、どちらにしもうかとしばらく考えました。あら人は、その子の十円を取つて菓子をやらなさいが可哀そうだと思いましたが、ザーン神父さんは信仰の人で、その子が寄附したら百倍のねうちがあると信じていました。その子はお金と箱に入れて喜んで帰りました。その子は菓子を食べませんでしたが、私はザーン神父さんの信仰に感心しました。その子は、いつかその一つの犠牲の為に、永遠の救霊セイリを得るかもしれません。その行いは、本当に神様を喜ばせたと思います。

お爺さんと菊

松阪教会から歩りて十五分位離れた所にYちゃんといふ八十を越えた一人の大工さんと、その妻が住んでいました。お爺さんは人からカトリックの話をきいて公教要理を一冊もらい、それとよく勉強して洗礼を申込みました。試験した時おじいさんは本ちに徹底的に教理の意味があがつていました。お祈りもちゃんとわかつて、あんなに年をとつていたのに、くわしく教理を学ぶ方は珍らしかった。

洗礼を受けたからは、おじいさんは毎朝六時までに、又時には六時前から教会に来て、六時半のミサにあすかりました。私はいつも六時に教会の扉を開きましたが、時々おじいさんは待っていますので、私はおじいさんに余分の鍵をあげて、「おじいさんが来られた時、まだ教会が開まつていまつたら、この鍵と使って下さい」と言いましたら、おじいさんは大変喜んで、殆んど毎日六時前

に来られました。

一・二年間信仰生活をつづけましてからある日のこと、おじいさんの家から知らせがありました。おじいさんは病氣で命が危いということでした。私は早速おじいさんの家に行って、告白と勧籠と聖体と病者の塗油の神跡を授けました。そしておじいさんに、「これからは安心して下さい。おじいさんはよく準備が出来ていますから、万一件のことがあつても心配しなくてよろしい。安心して下さい」と言いましたらおじいさんは、「しかし私はまだ死にたくないません」と言いました。何故かといふと、「私は菊の花の苗を沢山鉢に入れて育ててますが、松阪の『聖母の汚れなきみ心の教会』にその花を捧げたいのです。今私が死んだら、或いは私の体が動けなくなつたら、せつかくの花は枯れてしまします。こういう場合はマリア様に奇跡をお願いしてもいいでしょうか?」と私に尋ねました。そこで私は、「そういう美しい目的だつたら、御遠慮なくマリア様に頼んで下さい。マリア様を喜ばす為に、あなたはもう少し命を延ばしたいのですから、一切の事をマリア様

にまかせたらよろしい」と答えました。おじいさんは、「それなら私はマリア様に頼ります」と言い、そしてみどりのスカラリオを胸につけて、真っこまで祈りました。

二・三日経て意外にもおじいさんの病気は完全に治りました。そして秋になりました。おばあちゃんと一緒に教会に持つて来て下さいました。私はライトバンという車をもつていましたから、自動車でその花を運ぼうと思いましたが、花の高さは一メートル以上でした。私の車の天井は少し低いので、その花は車に入りませんでした。それでお爺さんとお婆ちゃんはリヤカーでその花をもつて来て、祭壇の両側に飾る二ヶ月程おじいさんは花に水をやつたりして非常に大切にしていました。

おじいさんはマリア様に、「二年間だけ命を延ばしていただきたい」とお願ひしましたが、不思議にも、おじいさんは一度二年間だけ生き長らえて、二回の秋だけ自分の望み通りに、聖母の教会に自分の造った菊の花を飾りました。鉢の数は十八位だったと思ひます。一つ一つの鉢に、二つ三つの大きなか菊が咲りていま

した。白いのも、黄色いのも、紫のもの、とてもきれいな花でした。聖母のお祈りによそおじいさんは、非常に健康体でその二年間を過ぎました。が、それから又、中気だつたと思ひますが倒れて、歿跡と授かづからず安らかに亡くなりました。

おばあさんの方も熱心でしたが、おじいさんが亡くなりから二ヶ月位たつて、一人の娘さんの家に遊びに行つた時、いたんだ魚を食べて亡くなりました。おじい夫婦は天国で私共の来るのを待つからると相違ないと信じます。



聖母から教わった敷地

松阪カトリック老人ホームの敷地は、村上さんとソリ食しい老人に出現なさった聖母マリア様によつて選ばれました。

村上さんは片目で、片腕は動かず、殆んど無学な老人でした。二、三年前妻と一緒に洗礼を受けたから、最も忠実に信仰を守り、それ以来欠かさず毎土曜日毎に松阪の教会に歩いて来て、一晩泊り、次の日曜の朝ごみさにあづかつていました。村上さんは、大河内という遠方の村に住んでいましたから、教会まで日帰りすることは無理でした。

この老夫婦は、いつもゆっくり歩き乍ら、口サリ才とにぎって、聖マリアの汚れなきみによ、今も臨終の時も我等の為に祈り給え」とスカブラリオのお祈りを唱えていましたが、片道は一時間以上かかりました。

その頃、私たちは、カトリック老人ホームを松阪に設立するつもりでーたが、い

くら探してみても適當な敷地を見つけることが出来ませんでした。

このおじいさんは、何週間も前から、時々聖母様が自分に現われてお話を
かかつたことがあると私に知らせましたが、私はおじいさんを疑いませんでした。
そこで私はある日おじいさんに、「聖母様に、老人ホームを建てるべき場所はど
こか尋ねて下さい」と頼みました。

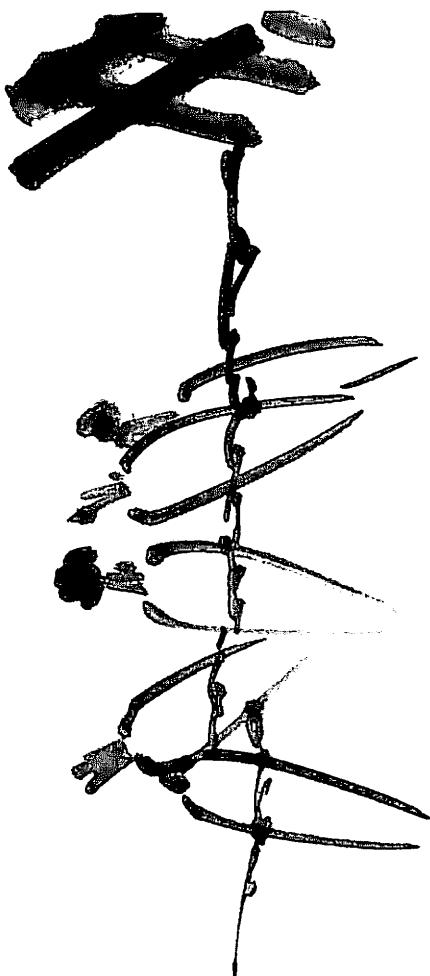
初めて聖母がおじいさんに現われた時は假教会の中でしたが、おじいさんはマ
リア様に言いました。「神父さんは老人ホームを建てつゝモリですが、なかく適
当な土地が見つかりません。どこに建てたらよろいか」と尋ねると、マリア様は
「ここだ」とおっしゃいました。しかしそこは空地でした。私はそこに教会を建
てる予定でした。おそらく聖母は、老人達が礼拝する所はここだとおっしゃった
のかかもしれません。私は、「老人達の住む所を教えていたまき石のです」と言うと
おじいさんは「承知しました」と言い、それから一ヶ月位経つて、聖母のお返事を
私に伝えました。「聖母は、老人ホームは殿町の教会から南向の道の、ごく近

「所に建つべきものだ」とおっしゃいました」とのことです。聖母の出現は殿町の假教会の中であり、聖母は御自分の御手を伸ばして、その敷地を指さされました。
 おじいさんがこのことを伝えた時、私は少し不思議に思いました。それは聖母が指された方面に今迄適当な敷地を気付いたことがなかつたからです。それで、「ひつかー、まゝ」と思つて、おじいさんは一寸議論しましたが、おじいさんはあくまでも心が動かず、「聖母はこの教会のすぐ近くの南の方面を指されたから、刃で耐強く祈りをつづけて下さい」と言いました。

私はずっとお祈りを捧げましたが、一月くらい経つたある朝の八時半頃でし
 た・松阪市役所の松岡助役さんが、思いがけなく教会に来られて、「神父さん、あなたが計画している老人ホームの為に、大変理想的な敷地を紹介します。
 松阪市の所有地ですが、もし老人ホームを建てられるのでしたら安くやすくて
 あげます」とのことでした。「どの方面ですか?」と尋ねると助役さんは、「こ
 の教会からまっすぐ南で、すぐ近くの所です」と、マリア様と同じように指差

しました。考えればこの会話は、マリア様が村上おじいさんにお現われに至った同じ部屋の中でーた。

私は大喜びで助役さんと一緒に出かけましたが、南に十分位歩くと、なる程私共の注文通りの立派な田圃がありました。そこで早速メリノール会の管区長フューラ神父さんと、古屋司教様の許可を得てその土地を買つたのです。



墮胎しないで

私が松阪にいた時、こういうケースがありました。ある信者の夫婦に四人の子供がありました。教会から非常に離れた所に住んでいて、主人の仕事場からも大分離れ不便な所でした。ところが、その妻は妊娠をしました。近所の人達は皆、「四人の子供をかえ、主人の給料も安いし、墮胎するより仕方がない。是非墮胎するように」とすすめました。お医者さんもどう言いました。

その婦人は私に相談しました。「その子供は、あなたの子供ではなく、神様から授かった子供です。神様の子供だったら、子供を育てるのは、神様御自身の責任です。安心して生みなさい」とすすめました。婦人は私の言う通りにし、子供を生みました。

それから間もなく、その夫婦は県立住宅のくじが当りました。新しい住宅は家賃も安く、父親の仕事にも、教会にも近く、非常に便利な所でした。沢山な

人が申込みました。数世帯しか当りないのに、くじはその家族に当ったのです。その後、主人の給料も昇り、前よりも楽な生活が出来るようになりました。本当に奇跡的でした。

又もう一つ、京都の病院にあつた事です。私は度々その病院に行つていましたが、ある日数人の人に洗礼を受けました。その中で一人は、洗礼を受けたから間もなく妊娠してることがわかりました。しかしその方は重症の肺病患者でしたから先生は、どうしても墮胎しなければならないと言いました。しかし私はその婦人にカトリックの立場を説明しましたら、その方は子供を生む覚悟をしました。それと聞いた先生は大変怒り、「相談があるから病院に来てほー」と私に電話をかけてきました。私が病院に行くと、五人の先生が集つてお部屋に通されました。先生方は、「もしこの患者が墮胎しなければ、この病院に置くことは出来ません。」と言わされました。私は、「この婦人と京都の別な病院につれて行きます」と言いましたと、先生

方は笑って、「京都のどこの病院に行つても全く同じことだ。肺病患者が妊娠した場合は外らず、どこの病院でも墮胎させる。あなたの宗教は間違つてゐる。」と言われました。そこで私は、「もし京都にこの婦人を入れてくれる病院がないなら、神戸のカトリック経営の病院につれて行きます。」と答え、早速、神戸の海星病院に電話をかけますと院長先生は、部屋が空りていなれば、「どうぞ連れて来て下さい。何とかします。」とおっしゃいました。その日に、私と私の伝道士はその婦人をジープの後ろに寝かせて神戸につれてゆきました。

やがて日が満ちて赤ん坊が生まれましたが、とても元気な赤ちゃんです。そして不思議にも、そのお母さんは大へん重症でしたのに、病気はきれいに治りました。その時は私は奇跡だと思いましたが、後に同じようなケースが米国にも次から次にありましたと聞きました。あまりにも度々でしたから、米国の婦人科の先生達は、これには何か特別な理由があるのではないかと調べましたところ、終にわかりました。それは妊娠した女は、その赤ちゃんが大きくなるに従つて、母親の肺を押さえようとして、自然気胸

となり、肺を休ませるから、その為に肺病が治ります。ちょうど傷を毎日もんぢら、なか／＼治りませんが、傷にやわらかく休ませたら傷は早く治ります。人間の肺もいつも動くから、その傷は治りませんが、肺を押さえたら肺を休ませることになり、傷は早く治ります。その為その婦人の肺病も治つたのです。やはり神様は自分の子供をよく守つて下さるのです。



朗らかになつた娘

153 娘になつたらうか

「人のお母さんが私のところに相談に来ました。自分の娘が黙つていて何も家族と話さないのです。娘は若く、頭も大変良く、その上音楽も大変上手でした。しかしどうしたわけか、ずっと黙つてしまつた。学校の成績はよかつたのに家の人にこころよくなません。それでお母さんは心配してしまつた。家中にはいつも淋しいでした。「どうしたらよいでしょうか? 私は娘と話したいのです」と言ったので私は「あなたは自分の父親と親しくしてしまですか?」とききましたと、そのお母さんは、「私の父親はもうとっくに亡くなリまーた」と答えました。「あなたの本当の父親は神様ですよ。神様はあなたのやさしいお父様です。すぐちうた父親よりも神様はあなたを可愛がつて下さります。あなたに生命をお与えに下さつて、毎日必要なものを衣食住の為にお与え下さつていますが、あなたは神様とお話してますか?」と言ふと、「私は少しも祈つていません。神様の存在は信じてますが、お詫はしていません」と、そこで私は「も

しあなたが神様とお話をさうになつて、又神様に従順に従うさう心がけたら、おそらくあなたの娘もあなたと親しくし、あなたの言ふことを聞くと思います。先ず自分の心を直してから他人の心を直すさうに、それが順序だと私は思ひます」と申しまーた。お母さんは、「なるほど私は今までそんないとを考えたことがあります」と申でーたが、だもなことです。これからさうのさうにします」と。そして私は、「今度あなたの近くの教会の神父さんに会々『神様の御教^みを習いたい。神様と親しくしたい。』とかつしやつたら神父さんはきっと適当に指導して下さると思ひます。そして洗礼をお受けになつたら私に知らして下さい。記念にロザリオを送りますから」と約束しましたが、その婦人はその通りました。

何か月か経つてお便りがありました。洗礼を受けた日が決まつたので、私はロザリオを送りましたが、後に礼状が来て、「私の娘は本当に朗らかな人となり、家中明るくなつました。やはり天の御父神様に孝行してからは、私の娘も孝行するようになりました。本当にありがとうございました」と書いてありました。実際にあつた事です。

おがみやさん

ぶんちゅうさんは八十歳を越えた老人です。松阪から大分離れた山の奥に一人で住んでいました。自分の家には十数種類の祭壇を飾って、毎日一つ一つの祭壇の前で祈りました。Bさんは家は祭壇だらけでした。

ある日、人から松阪に新しい宗教が来たと噂をきいて、Bさんは教会に来ました。「どういう宗教ですか?」と尋ねたので、私は簡単に説明しました。そしてBさんはカトリックの教を学べて洗礼を受けようにすすめますと、「私は家が非常に遠いので、とても来にくいか、しかし時々参ります」と言いました。Bさんは「私の家は祭壇で一杯で、もう新しい祭壇を設ける場所がありません。又私は一つ一つの祭壇の前で、毎日祈をしているので、これ以上祭壇を増やしたら大へん困ります。今でも手一杯です」と話でした。そこで私は、「祭壇を作ることが出来なかつたら、マリア様のお守りさんでも家の壁に押ピンでとめて、毎日二、三

回スカブリオの祈りを唱えて下さい。どうすればきっとマリア様のお祈りによって、お恵みを与えられます」と言いました。Bさんは、「そんな簡単な事だつたら出来ます」と喜んで家に帰り、その後マリア様のスカブリオを壁にかけ、几帳面に毎日ミスカブリオの前で、マリア様に祈りました。他の祭壇の前でもいつものように祈りを唱えました。

それから一、二週間経つてからBさんは又教会に来ました。そして「あなたが言う通りマリア様に祈つていろが、どうしたわけかそろ祈りが一番好きになりました。しかし他の祈りも絶対やめられません。若の時から拜んでいたから、そろ簡単にはやめられません。しかしマリア様のお祈りが一番好きです」と言いました。私はBさんに信仰上の話をして「ずっとマリア様に祈つて下さい」とすすめました。

それから又二、三週間経つてBさんは教会に来ましたが、「私はもう他の祈りをしなくなり、マリア様に対する祈りだけしています。他の祈りがいやになつたから」とのことでした。私は、「おじいさん、あなたはマリア様のおかげで、マリア様はあなたの祈り

を天地万物の創造主なる神様にとりついて下さったから、あなたはようやく本物の宗教を見つけることが出来たのです。感謝して下さい。又早く洗礼を受けた方がよろしい」と言いましたらBさんは「私はそぐなく簡単にキリスト教に入らねないと思っています。ずっと何十
年も前から祭壇を設けてお祈りして来ましたし、今はもう祈るほかないが、その祭壇を取ってしまった大変淋しい感じがします。又私の家も空っぽになってしまいます」と
言いました。私は、「しかしあなたが洗礼を受けたまでは、どうしてもどうしなければ
なりません」と言いました。Bさんは一寸がかりして家に帰りました。

それから一二週間経つてBさんは又教会にやって来ました。そして「神父さん、私は
祭壇を取りのける事は出来ませんが、どうかあなたが私の家に来て取りのけて片付
けて下さい。一切のこと、あなたにまかせます」と言いました。それでK伝道士と私は
トラックでBさんの家に行って幾つもの祭壇を取りのけてきました。一つだけ残して、本当に
の神様の祭壇にして、家を祝福して御像、御絵、十字架などを祭壇に飾りました。
取り除けた祭壇をトラックに積んだら一杯になりました。Bさんは部屋の真

中に坐り、何も言わず下を向いて悲しそうな顔をしていました。私は同情して、「あなたは今手術中です。盲腸炎にかかった時、麻酔をかけたりと手術したら痛いでしよう。手術が終つてからも二・三日或は一週間でも身体が痛いと思いません。今日はおじさんは手術してもらつて心は非常に苦しいでしようが、暫らくしたら大変気樂になります。マリア様に祈つて下さい」と言うとBさんは余り返事をしませんでした。

それから四・五日経つてBさんは又教会に来て、「私の心の傷はすくり治りました。早く洗礼を受けたい」と言わされました。ちょうど九月の老人の日の少し前でした。私はいつも老人の日に近所の二百人の老人たちを招待して、一オートバイを差上げ、さくやかな慰安会をしていました。その慰安会が終つた時、Bさんと一人のお婆さん、このお婆さんは近くの方で洗礼を望んでいたが、この二人に、聖体降福祭前に百人位の参加した老人の前で洗礼を受けました。聖体降福祭の後、Bさんは皆に向つて「私は八十何才になりますが、今日ほど心の喜びを感じたことはありません。私は

今まで幾種類もの祈りを捧げていましたが、今度はイエス様、マリア様に祈りを捧げて私の心は喜びで一杯です。」と心の喜びを話しました。

Bさんはそれから又一週間後教会に来て、「私の姉と妹が同じ村に住んでいますが、大変弱々しているから洗礼を受けに来てくませんか」と言いました。それで私はその村に行き、簡単にイエズス様の御教を説明し、洗礼を受けました。おばあちゃんは八十歳以上でしたが、洗礼を受けた二、三日後亡くなりました。そしてBさんは洗礼を受けながら二、三ヶ月後に安らかに亡くなりました。



聖母の注射

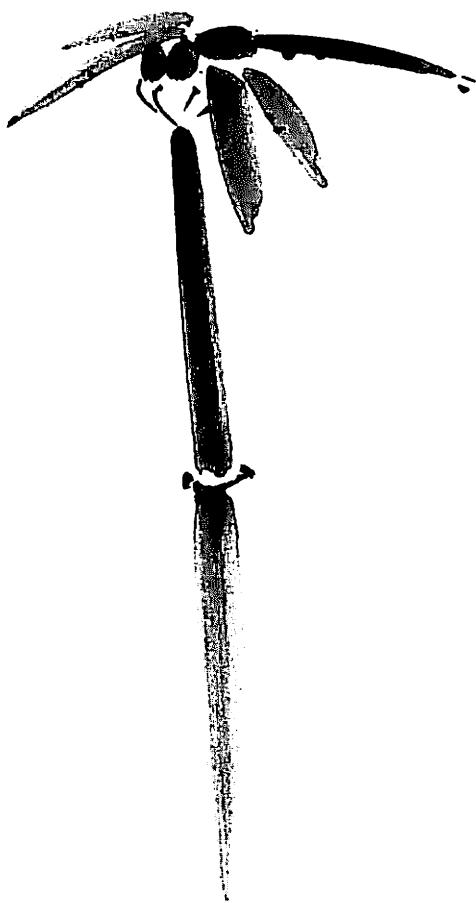
松阪に行って間もない頃、信者の娘が病院に入院してしまった。その隣りの部屋にＫさんとＹ婦人が胃腸の手術をして入院していました。便は横腹から出しだす。とても重症で治る見込みは全然ないと医者から言われました。大変痛む時もあり、二者は度々痛み止めの注射をしていました。信者の娘はＫさんに信仰の話をしましたら、Ｋさんは洗礼を望むようになりました。

その後信者の娘は退院しましたが、時々Ｋさんを見舞に行つて、ある日、「私と一緒に洗礼を受けに行きました。私はＫさんに一寸話を聞いて洗礼を受けようとなります」とＫさんは、「今とても苦しいです。痛み止めの注射をしていただき、もう少し楽になつてから洗礼を受けかりたい」と申しましたので、看護婦Ｙさんを呼びましたが、「看護婦Ｙさんはなかなか来ないのです。暫く待つてみて又呼びに行きましたら、看護婦Ｙさんは」と信者さんは、「あの外人に注射してもうつたらどうですか」と言いました。

お医者さんは、私を病気治一の宗教と思っていました。その為に怒ったのです。私は小さい鞄を持っていましたから「患者」と思い、ながく注射してくれません。私は残念に思いました。Ｋさんは大へん苦しくて重症ですから、どうしてもその日に洗礼を受けたくなりました。そこで私は、「お医者さんが注射してくれないなら、マリア様に注射してもらいましょう」。三人で祈りを捧げまよう」と言うと、Ｋさんは「私は苦くて祈りがあえません」と申しますので、私と娘と二人で、「聖マリアの汚れなきみ心よ」の祈りを二、三回唱えました。すると以外にもＫさんは落ちついた顔で手を合わせ、私と同じように十五回祈りました。「もうナシモ痛くありません。楽になりました」と言いました。私は感謝してゆっくり洗礼を受けましたが、Ｋさんは本当に喜びました。

二、三日の後、信者の娘がお見舞に行きましたが、お医者さんはＫさんに少しも治療してくれません。「なぜ外へ先生を呼んだのか」と言つて大変怒つておられます。Ｋさんはその後痛くなつたことが度々ありましたが、いつもマリア様に祈りました。マリア

様の注射はよくやきました。お医者さんは、初め私が洗礼を受けた時、大変が少しも痛まないと言つた時、私が特別な注射をしたと思ったようです。私は少しも薬を使ひませんでした。その後二・三ヶ月経つとお医者さんは、ようやくわかりました。私が来なくて大丈夫はお祈りによって楽になつたといふことが。後に大さんは亡くなりましたが、本当に不思議なことでした。



家出娘

松阪にいました時、毎週一ペんYちゃんところ信者の家で教理を教えていました。その家の主人が申しますには、「この近所に、本当に可哀そうなお母さんがあります。とてもよい方ですが、一寸自分の娘と喧嘩ケンカして、その娘は家出してしまいました。娘の年は二十がらいで、その為にそのお母さんは三日間ずっと泣り出ます。娘の友人の家に聞こえ、親戚の家も調べましたが、娘はどこにいるのか全然わかりません。」とのことでした。

私は早速そのYちゃんところ信者の方に、「そなが母さんをここにつれてきて下さい。話へたりことがありますから」と言いましたらYちゃんはその通りにしてしまった。

私は悲くんでいるお母さんに説明しました。「あなたの娘はどこにいるか私は存じませんが、私の様んでいる神様は、凡ての人をお造りになり、凡ての

人のお父様ですから、又何でもわかつておられるから、あなたの娘のかくわでいる場所もわかつておられます。あなたも若し神様にお願いへたら、神様は娘を帰して下さると思います。しかし神様にお願いする前に、今までの犯した罪を、心から痛悔して、二人とは神様によく従うように約束していただきたいのです。なお神様に何か差上げたら、神様はきっと速やかにあなたの願いを聞き入れて下さるでしょう。」と申しました。するとその婦人は、「何が教会に寄附でも差上げましようか」と言つたので「それよりも、もし自分の近所に貪りの家族がありまへたら、その家族に何か差上げた方がよいと思ひます。」との貪りの家族もあちだの家族、あなたの兄弟ですから、その家族に物を差上げたら、自分の家族に物を差上げると全く同じです。しかしつまらない、物をあげなさい下さい。神様はえらい方です。その家族に果物とか、お菓子でも割合に上等なものを差上げたら、神様はあなたに対する義理をもつとうになります。それから「私の娘を帰して下さい」と神様にお願いし

たら神様は断らないと思ひます」と申しましたら、その婦人は「私の家の近所に、本当に會い生活をして、一世帯がありますから何か差上げます」と言いました。それから私共と一緒に夕の祈りを唱え、九時になったので私は教会に帰り、その婦人も自分の家に帰りました。

その次の朝のことでした。八時頃教会の庭に昨晩のお母さんと、その娘が腕を組んで入って来たりです。二人とも大へん楽しそうな顔をして、ニコニコ笑いながらお母さんは説明しました。「昨晩九時過ぎ、私が家に帰り、ちょうど玄関に入った時電話がかかってきました。娘からです。『もう帰つてよいか』とのことです。私は大喜びで『すぐ帰つて来て下さい』と言いました。娘はすぐ帰つて来ました。私はカトリック信者になりました」と言つたので、私は公教要理を差し上げました。それから私は注意しました。「あなたはちゃんと神様に何か差上げる約束をしましたが、実行しませんか?」とやきましたら、お母さんは「まだしていません。

神様は私より早くして下さったので時間がなかつたのです。しかし帰つたら何がします」ということでした。神様は何とやべーいお父さんだろ?と私は思ひまして、「はず何か貪るい家族にあげて下さい。そろそりと、娘と又けんかって、又同じようになりますからません」と注意しました。



音 樂 会

松阪には音楽の好きな人が、かなり沢山おりました。が、音楽を練習する場所がありませんでした。指導者のSさんはある日教会に来て、「教会の伝道館を貸してくれませんか」と言つたので、私共は喜んで貸してあげました。Sさんは演奏会をするつもりでしたが、以前にも演奏会をした時、広い場所を借りて、せっかく上手にやつたのに、聴きに来る人は殆んどありませんでした。Sさんは私に相談して、「どうしたら人を集めうことができるでしょうか?」と尋ねましたので私は「もし私の言う通りにすれば、必ず沢山な人が聴きに来ると保証します」と答えました。「ちと少しこれに来ると」とSさんはおっしゃいました。広い新らしい公開堂が出来上るから、その公開堂で演奏会を八月十五日に一回下さい、そして又演奏する歌の中に入り悪い歌がなければ、又もしマリア様のアヴマリアを一つ、そのプログラムの中に入れたり、マリア様のお祈りによつて、きっと沢山な人が聴きに来るでしょう」と答えました。Sさんは未信者で、何も教えを知らない方で

すが、「八月十五日まで毎日、松阪教会の聖母の御像の前で、ロザリオの一一つを珠をにぎり、「聖マリアの汚いなきみ心よ」の祈りを唱えていただきたい」と言いましたらSさんへは、謙遜に私の言葉に従いました。毎日欠かさず郵便局に勤めていましたが、郵便局の仕事が終つたら必ず教会に来て、一人で教会の中のマリア様の御像の前で、約束した祈りを熱心に唱えました。

八月十五日、私も演奏会に参りましたが、そのホールはもう、千人以上入れる大きな場所ですが、私が参りましたホールは一杯で、坐る場所はありませんでした。私はステージの所に行きSさんに会いましたら、Sさんは大喜びでした。私はどうしても聴きたいと思って二階のバルコニーに行きましたら、さくも一杯でした。が、ようやく坐ることが出来ました。

約束（その三）

松阪のある病院で、Kさんとソウ六十才位の婦人に洗礼を受けました。この方はあまりくわしく教理を学ぶことが出来ませんでした。住んでいる所は松阪から大分離れた農村でした。

退院してから私は必ず毎月一度この方の家に行き教説を授けました。Kさんはあまりくわしく教理を学ばなかつたのに、大へん忠実に祈りました。主に聖母の汚れなきみ心の信心の祈りでした。ひとりのスカラリオの祈りでした。

ある日、私が御聖体をもつてまいりました時、Kさんは少し苦しくて、いるようでした。病気が大分重いと思いましたが、私は大へん急いでいましたから終油の跡を授けなりで教会に帰りました。しかし帰る前にKさんに、「もし病気が重くなつたら、必ず私に連絡して下さい。息子

さんにも電話をかけさせたら、私は喜んで参ります。夜中でも参ります」と言いました。帰りにモ又「今の私の言つたことを忘れなつて、病気の重い時ここに来るつもりだから、終油を授けるつもりだから」と申しましてからYさんは、「承知しました。はゞそろします」と申しました。

それから二・三週間たつてから出来ました。朝の二時頃たつたでしよう私すぐそばで「神父さん! 神父さん!」と声がします。私は目が覚めました。はつきり声がします。私のすぐそばです。調べたら誰もいません。私は考えました。私は当時三十人あるいは四十人へ病人を受持つていましたから、どの病人か?と考えました。どうもYさんの声に似ています。きっとYさんは大分年をとつていて体が不自由で、もう歩けなくなつたところことを聞きましたから、早速調べました。

ちょうど都合よく、翌日Yさんの村から一人の信者が来たので、「Yさんは元気が?」と聞くと、「元気です。歩いています」と答えました。

私はKさんの声だと思つましたが、実はその声はKさんの声でした。

次の月に、私はKさんの家に御聖体を授けに行きました。Kさんはもう亡くなつたところです。「なぜ私に知らせなかつたか」と聞くと、その若いお嫁さんは「実は母は私の主人に教会に連絡するよう頼みましたが、夜中のことだし迷惑になると思い、連絡しなかつたわけです。」と答えました。

調べましたら、ちょうど私が夜中に声を聞いたその日、その時間にKさんのが亡くなつたのです。私はその家族の方によく説明し、「あなたの母さんは臨終の時、私に知らせると約束しましたが、その約束をよく守り、靈魂が私のところに来て、私を呼びました。悲しい声でしながら、お母さんの靈魂は練獄にいると想いますから、私は明朝お母さんの為にミサを捧げたいので、是非参加していただきたい。お母さんは熱心な信者ですから」と申しましたら、その家族の方が一、二人来てくつました。

もし誰かが死ぬ前に約束したら、必ずその約束を守ります。

間違えた部屋

昭和八年か九年でしたか、「ベタニヤの家」のプロジェクト神父様の手伝いをしていた時、ベタニヤの家のすぐ隣りの大きな結核療養所に御聖体を受けに行きました。療養所に参りますと、一人の割合に元気な患者が玄関で私を迎え、ずっと信者のいる病舎に案内して下さいました。時々同じ日に五十人の方に御聖体を授けましたが、案内者の方は、はっきりとその部屋を知っていました。療養所は非常に患者が多くて本当に複雑な所でした。

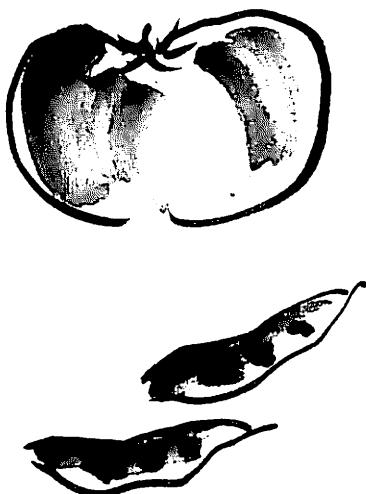
ある日のこと案内者の方が、ある部屋に私を案内してドアを開け、「ああこれは間違りです。ここに信者はいません」とおっしゃいました。しかし私は一つのベットの上にロザリオが掛けあってあるのに気付きましたので、「間違いじゃない

で～よう、この方は信者ではありませんか？」と尋ねると、「ちがいます。ここには信者はおりません」と答え、すぐ私を引っぱって別な所に参りました。

ベタニヤの家に帰つて、何時間が経つて又療養所の方から、「もう一度来て下さい。重症の方がいますから」と私を呼びに来たので、私は早速参りましたが、意外にもその間違つた部屋でした。案内者の方は今迄一度も私と間違つた所に案内したことありませんでしたのに、その日に限つて間違いましたと言つて、まーたが、実は間違ひはありませんでした。私がその部屋に入ると、その重症の患者は説明しました。「実は私は一年前、大変重症の時に、臨終だと思つていた時に、も一人の神父さんがいなかつたので、一人の患者から洗礼を授けていただきました。その後神父さんによく知らせる筈でしたが、どうしたわけか、私は神父さんに知らせる力を失りました。信仰はしていましたが、御聖体をいただいた事が一度もありません。今は私の命が大変危りですから、どうぞ私の罪を救えて下さい」とおっしゃったのです。そこで私は罪の告白を聽りて、又結婚の問題もあつたのですがそれも直してや

り、その問題も解決し、又病人の跡と、翌日には聖体の跡を授けました
が、その方は翌日、安らかに逝くなりました。

「間違った部屋に入った」と私の案内者がおっしゃったのは間違ひでした。神様
が私とその部屋に案内をやつたのだと思ひます。又、聖母のロザリオモ・モレヘン
トの上に飾つて置かつたら、私はその方が信者であることを知る事は出来なかつたと
思ひます。



街頭募金

私が初めて日本に参りました時、ある日のこと、古屋司教様が山科の同和園に行かれるとなりました。一人のおばあさんが大分弱っていて、どうしても古屋司教様に最後の杖跡を受けたいという願いをすすみました。司教様は早速行かれ、おばあさんに杖跡を授けられましたが、帰つて来てから少し悲しげに、「私はカトリック教会の司教で、世界一の宗教の司教であるのに、カトリック信者の為に老人ホームがなくて、仏教のお話をなさういる。どうしても京都府の近くに老人ホームがほしい」とおっしゃいました。「私はその時から、どうしても老人ホームを京都の近くに建てたいと思いましたが、間もなく三重県に行くことになりましたから、三重県で老人ホームを建てました。しかし京都から三重県の老人ホームに入るのは、ちょっと手手続きがむつかしいです。その後ようやく宇治教会に転任しまったから、また京都の近くに老人ホームを建てようと思つました。

しかしこれは神様のお望みかどうかをハシキリ知りたく思いました。お金はありません

でしたが、もしかトリフォン経営の老人ホームをこの附近に神様がお望みになりましたら、お金がなくても神様は何とかして下さると信じていました。私には神様の代理者が三人おりました。古屋司教様とメリノールの管区長と府庁の社会課の責任者、その三人ですが、私は順順に三の方にその問題について話しました。三人共、京都の近くに老人ホームを望んでおられましたから、これは神様のお望みとハッキリわかつて来て、早速仕事を取らかりました。

はじめの仕事は、主に募金することでした。出来ただけ多くの人がこの美しい仕事を神様御自身がお望みになつた仕事に参加させた方がよいと想ふと、街頭募金をし始めました。何万人も人々が小さな寄附をしましたが、こうじう仕事に対して寄附した人は必ず神様から祝福されると思ふと、私は毎日そのことを思い起しくやら募金の仕事を続けました。

しかしようやく建つようとした時は、まだお金が足りませんでしたから、府庁の社会課の方で、少しが金を貯しましょとおっしゃいました。利息は非常に少なく、老人ホ

「がお束上げてから、少しづつ借財を返せばよいと言われましたが、私は考えました。

「神様は全能者で、そして神様はこの老人ホームを望んでおられるから、お金を借り必要は全然ありません」と言って、その御親切を申し出を断りました。お金は足りなかつたのに、どうこう返事をしました。

しかし建築会社にねらへき、時が来たら、不思議にも、いつでもお金が十分ありました。何をするにもの仕事始め前には、その仕事は神様の望んでおられる仕事を、或いは自分の名譽の為にする仕事か、ハッキリ確かめる必要があると思います。もし間違ひなくその仕事が、神様のお望みに該する仕事であれば、絶対失敗する心配はありません。神様は勿論奇跡的に、一人だけの金持に寄附させる事が出来ます。しかし一人だけの人からお金と預くよりも、大勢の方の小さな犠牲から老人ホームを建てての方が多いと思います。

ある日つゝと、一人の大学生が私の前を通り、三十円のお金を箱に入れました。箱に入ってしまったから、「そのお金は、私の弁当の為のお金でした」とおっしゃいま

した。私は氣の毒に思そ、私のポケットから少しお金を出さうとしましたが、その大学生は受け取りません、逃げてしましました。

また、朝の「」でーた。禪宇の若いお坊さんが、朝からずっと回って色々な所からお金ももらつたようでした。沢山なお金が托鉢の袋に入つていました。私の前を通つた時、その袋に手を入れて、お金を沢山つかんで私の箱の中に入れて下さいました。それからどうかへ行きましたが、それから三十分位たつてから、その方がまた通り、こんどは袋のお金を全部、何回も手を入れて私の箱に移しました。私は心配して、「先生は本部に帰つたら、きっと目上の方から叱られるでしょう」と言ひますと、「そうではありますん。心配しないで。私は全部あなたに差上げたい」とおっしゃいました。私は本当に感謝しました。その方を私は忘れられません。

沢山なお寺さん、尼さんも殆んど皆百パーセントまで、私のそばを通つたらお金を入れて下さいました。そういう方の寄附金は最も神様を喜ばすものと私

は信じています。そのため募金することは少し恥ずかしくありませんでした。
かえつて大いに人の為に働いてると思そ、いつも楽しくなりました。

又ある日の事、七十才位の方が私の箱の近くにしばらく立っていました。私を見て一寸考えているようでしたが、四五分たつて私の箱のそばに来て尋ねました。
「あなたは三十年前、戦争直後、三条教会にいた方でやありますか」と。私は
「はい、三条になりました」と答えると、「私はその時大へんお世話になりました。
た。私は新教の牧師です。今日はあなたの箱に入れたい」とおっしゃり、その後
牧師さんは手をとり一寸貰って生活をしておられたかもしれませんのに、沢山の
お金を私の箱に入れて下さいました。

こうした善意の方々のおかげで、神の園老人ホームは出来たのでした。

失くなつた財布

ある教会にあつた事でした。ある日教会の玄関で一人の信者の男と話していました。私は、ボケットから財布を出して香部屋におき、その隣りの教会の中に入りました。用事がありましたが、一分間も留守にしていませんでした。ところが帰つて来たら私の財布がありません。その男の信者はいますが、その方に尋ねると、「私は財布をとりません」と言いました。財布には施設を建てた為の、当時のお金で十万円程の現金が入つていました。私は二、三回もその方に、「どうしたんですか?」私はここに財布を置いたのにありません。ここに置いた人です」と言いましたが、その方は、「私は盗りません」と言いました。勿論あまり人を疑つてほしくませんが、もしもその方が財布を盗まなかつたら悪魔が盗んだかもしません。悪魔はよくそういう事をしますから。

この方はあまり教会に来ない方で、お酒を飲むくせがあり、経済上少し困つていたかも

されませんが、本人が盗まなかつたと言ひますし、私はイエズス様が、「もしマントを盗まれたら上衣まで喜んで泥棒に上げよ」と言われたことを思ひ出し、私はイエズス様の言われる通りにしてようと決心しました。警察に頼んだら警察はすぐそろ方を調べ、もしその方がお金もつていらすぐ戻つたと思ひますが、私はそんな事をしたくないの黙っていました。後にまた伝道士の家に行つてきましたが伝道士も知らないと言ひましたから、それで私はあきらめて神様に掛けました。私はその方の為に祈つて疑あない」とへようとしました。

その次の日、郵便屋が来ましたが、私が十四才の時の学校の先生（神父でした）からのお手紙をいたしました。その先生からの初めての手紙でした。その中には盗まれたと同額のお金が入つていました。それ以後私はその神父からお手紙をいただきませんでした。これは初めて、また終りの手紙でした。本当に不思議な事でした。神様はそのお金に戻して下さつたのです。

それ以後、その信者の男は教会に来なくなりました。その後に私も転勤し

まへたが、十何年経て、その教会の神父から聞きましたが、その神父は勿論その事を全然知りませんでした。その冷淡な信者は熱心になり、最後の教説を受けた七くなつたということです。

私の主義として、洗礼の時靈名に私の名前をつけなさいと言いましたが、その方は何百人の中で私の名前をとりました。それで私はいつも責任を感じていました。その方の為に祈り、又救しました。私がその方を救せば、神様は私よりも憐れみ深の方ですから、もし盗つたとしても、神様は必ずその方を救って下さつたと信じています。



神の園を建てるまで

183 神の園と建てるまで

私は老人ホームを建てる敷地をさがしていましたが、なかなか適当な敷地がないので困りますと、府庁の方から「相楽郡には七つの町村があるが、相楽郡に老人ホームがありますから、その七つの町村に私共の方から建てるようにお願ひします」とのこと。そして、「あなたの方の村に適当な敷地がないか?」と皆に呼びかけました。木津の町長さんも、「私も老人ホームがほしいから私が敷地を提供します」と言われたので私は見に行きましたが適当な敷地でありません。あまり細長く、片田舎だったので断わりました。又、京都市長からも一番京都の方に一つの敷地があるとのことで、見せてもらいましたが、かけのすぐそばで日が当らず、暗かつたので断わりました。それから又、向日市の市長さんも敷地があると言われたので、私はそこに行きましたが、そこも駄目になりました。敷地は向日市の敷地でしたが、他の施設もあり、とにかく駄目でした。それから暫く待ちましたら、この所を

紹介して下さったのです。

私は以前から精華町に敷地があれば一番適当だと思ふございました。ここに来て見て、"ここだ!"とすぐ決めました。この井上町長さんと一緒に来ました。ここは山でした、整地したら老人ホームが出来ます。又、道もちゃんと造る約束してその日に決めました。

古屋司教様とメリールの管区長もここにつれて来て見せましたら、ちょうどよい所だとおっしゃいました。しかしこれを決めるまで、相当長い期間がかかりました。ここに精華町内に火薬庫があり、自衛隊がありますので、精華町の役場から整地を頼んで下さい、私共はお願ひに行く必要はありませんでしたが、普通はフルトーザーや土運びのトラックの為にガソリン代を出す必要がありました。この場合はガソリン代は要らないと言わされました。

街頭募金は週に二、三回、朝の十時頃から午後三時頃まで一月でした。昼食は、うどん屋でうどんを食べました。私は度々一人で立ちましたが、普通は

二、三人で三つの箱を持ちました。私はいつも二つの箱がいました。二時間立つたら一つの箱は重くなりたのでその箱を置き、軽い箱を首にかけました。場合によつては通りかかりの知つてゐる人、知らない人でも、「手伝つてくれませんか」と言つたら、知らない人でも手伝つてくれました。府庁に出す書類は全部Mさんがしました。

私は韓国人のカトリックセンターに派遣された時、「これは不思議なことだと思いました。日本人の老人ホームを建てる真っ最中、韓国人センターに派遣されました。韓国人は、「私は日本人の為に老人ホームを建てる」と言つても、韓国人には全然興味がないと手伝つてくれません。宇治にいた時、宇治の信者は手伝つてくれましたが、韓国人センターに行つた時には、「私はお願ひする事が出束ません」とした。しかし韓国人は非常に心が広く、「一つの部屋をカローネ父さんの為に寄附してもらいたい」と言つたら、寄附して下さいました。私は二日だけ韓国人の家を回つて百五十万円募金しました。一つの部屋だけ韓国人が寄附したら、それで十分だと思いました。韓国人は子供が多いから、ここに入

弓彌要はあまりありません。私は韓国人が「神の園に入りたい」と言つたら、人種差別せず絶対入れます。韓国人が入りないと言うなら、私は優先的に入れます。

田辺病院のこと

田辺病院を初めて建てた方は一人の女医さんでした。米国で勉強した方ですが、ここに来て、景色のよい所なので病院と建てましたが茶烟の真中でした。

その頃、日本にはあまり自動車もなく、又その時は近くにあまり人家もありませんでした。電車もバスの便も悪く、道も悪いので、病院に来る人は少なく、いつも赤字でした。一・二年辛棒しましたが病院を売りたいと言いました。

値段は八千万円でしたが、建てた時はその倍かかりました。売る時は半値です。冷暖房もありし、新しくし、私はその時老人ホームの敷地をさがしていましたので、この病院を買つたら、早速老人ホームが出来ると思いましたから、府庁

の人に相談すると、「それは本当の病院だから老人ホームにはならない。大分改造しなければならない」と言われました。そこで別な所をさがしましたが、それでも

その病院と病院として使いたいと思いました。

それから間もなく浜寺先生が宇治の私の所に来られて、「私は八千円で買つつもりですが、病院に来る患者が多いから、もし、あなたの方で患者をさがして下さるなら、すぐにもカトリック病院にするつもりです」と言われました。

浜寺先生は田井先生と親しかったので、田井先生に相談すると、「あの方は間違ひがない。お金もあるし、間違ひがない」と言われました。古屋司教様

に相談し、私は修道者の精神病院にしたいと言うと、司教様も「それが一番必要だ」と言わされました。私は精神病になつた修道者が一番可哀そうだと思ひます。そういう方はやめさせて家に帰り、普通の精神病院に入つたら、神跡を受けられなくなります。私はそういう方を救ひたいと思つて、日本中の修道会に手紙を出して、精神病にかかっている修道者がいたら紹介してほしい

と頼みましたが、「ここにはもう、方はない」と返事でした。もし私に
その住所だけ教えて下さったら、私は探しに行くのですが、修道会の方が協力
してくれませんでした。それで修道者の為の軽い精神病院を造ることは実現
しませんでした。

そのことで、ある方から叱られたこともありました。しかしそれはよかつたのです。
私はよい事をしなかつたのに責められました。その時は悪い事をすらつもりだっ
たのに叱られたのは、バランスがとれてよかったです。

私は今でもその病院に、二週間に一度行っています。今は洗礼を受けてい
る人が四人、教理を学んでいる人が三人位います。

泥棒災難

戦争中私はカリフォルニアの日本人の收容所から十六キロ位離れた教会に泊っていました。晩だけ神父の家に泊り、朝六時頃に收容所に行き、夕方まで帰りませんでした。夜には私の住んでいる部屋のドアに鍵をかけず、いつも明け放してありました。又、銀行に預金するほどのお金はありませんでした。毎月家賃とか、ガソリン代、食糧品代とて百ドル位になりました。

ある晩のこと、朝の一時半頃、誰かが私の家に入つて未だ音がしました。確かに誰かが家に入つて来て何か探しているようでした。私は目が醒め、すぐ隣りの部屋に行つて私のズボンを調べたら財布がありません。ちょうど月末ですから、そのお金を使うべき時でした。私はそれが金しか持つていません。私は毎晩守護の天使にその財布をまかせておいたのに盗まれたのです。必ずわかれがあると思つて、跪ひざまついて神様に感謝しました。守護の天使にも、こ

れは一つの玄義だと思いました。お恵みと思いました。

私の引出しにピストルがありました。收容所の方からもらつたもので、そのピストルを捨てねばなりませんから、私はそれを捨てるつもりでしたが、そのピストルをもつて、（ピストルには弾が入っていません）白いガウンを着ていましたが、隣りの部屋にまた音がするので、その部屋に入り泥棒をさがしました。しかしそゝ部屋には泥棒はいないのです。それから私は隣りの隣りの部屋にも入りました。ところが教会の神父が、こゝの神父も泥棒の音が聞こえ起きていました。私はその部屋に入つたらすぐ、「手をあげよ！」と言いました。その神父は可哀想うに両手を上げ、「撃たないでく」と叫びました。さううちに私は“これは神父だ”とわかつてきて、向うの神父も「あなたは誰れか！」と言つたので、「私はスタンバウフ神父」と言い、向うも「シメス神父」と言いました。その神父は早速電燈をつけ、二人は大笑いました。

私は面白くありません。私のお金は全部盗まれました。シメス神父も泥棒

を探してしまったが、泥棒はいませんから、シメス神父は早速警察に電話しました。警察は教会の真向いにありました。その村には三百人いません。その警察の方は私をよく知つていて、「財布を十五分位前に盗まれた」と知らせると、「はい、わかりました」と言いました。

この村には二つの食堂がありましたが、すぐ近くにはじめの食堂があり、警察の方がその食堂に入ると、朝の二時頃ですのに、一人の男が腰をかけ、コーヒーとドーナツを注文しました。そして私の財布を出し、お金と数えているところに入り、「手を上げよ!」と言うと、その男はすぐ手を上げ、つかまりました。

私はどうしてもお金が必要るうで、シメス神父にお金を借りましたが、二・三日すると盗まれたお金は返りましたが、以外にもそのお金は増えてしましました。警察の方は、「あの泥棒は他のところにも幾つも入ってお金を盗みました。しかし誰のかわからなりし、あなたは善い行いばかりして、さから、この泥棒の盗んだお金は全部あなたに上ります」と言いました。私は又ひざまずいて守護の天使に利息までいただいた

事を感謝しました。

東條 伍長

戦争が終つて、私はフェルセツカーニー神父、ハント神父と一緒に貨物船に乗つて、日本に参りました。京都に来たのは、昭和二十一年三月十九日でした。二、三週間のうちに、一人の進駐軍の方が教会にお願いに来ました。この方は十才位の日本人の親のない子供の世話をしてくれました。この子供は空襲の時、一人ぼっちになつたので、兵隊さん達は可哀そうに思つて、自分の所につれてゆき、その子供の為に軍服もこしらえさせて、「東條伍長」と呼んでいました。子供は英語もだんだんしゃべれるようになりました。この子供を一番可愛がつていた責任者の兵隊は熱心な信者でしたが、ある日、「東條伍長」を教会につれて来て、「日本語でこの子に教理を教えて下さい」と頼みました。私は教えることになりました。

私は少しお、ナヨコレートを米国からオツテ來たので、毎日東條伍長が来る毎にナヨコレートをあげていましたが、一人の子供に教えるより、沢山の子供に教える方がよいと思つて東條伍長に、「自分の近所の子供を集めてつれて来なさい」と言いました。それで東條伍長はその通りにしましたが、私のナヨコレートには限りがありました。とても大勢の子供につづつはあげられないのです、一つを半分、或は三人に分けました。東條伍長は余り喜びませんでした。それで次の日にはつれて来る子供の人数を大分減らしました。しかし私は他の子供にも、その近所の子供を教会にさそつて来るようすすめましたら、だんくそつ数が増えてきました。ある日私はその子供達に、「自分の家に病人はいませんか?」と尋ねました。すると一人の子供が、「私がお父さんは病氣で寝ています」と言つたので、私は早速その子と一緒に見舞に行きました。お父さんは二階で寝ていました。急がはしごを昇つて二階に行きお父さんに会いましたが、大へん瘦せていて、肺病で大変病気が進んでいました。あと一二週間しかないと私はすぐ感じました。

早速神様のお話をしましたら、お父さんは洗礼を望みましたから、お父さんに洗礼を受けましたか、とても喜びました。その後私はスイエズス様の御聖体を授けに行き、病人の歿跡も受けました。

その家の下の部屋にお婆さんが寝ていました。大分年をとつていて、私が話しかけても耳は遠いし、又お婆さんは昔の言葉で話しますので、私はそり言葉がわかりません。そこで私は二階の重症の息子さんに言いました。「あなたがお母さんに一寸信仰上の話をしたら、私はお母さんに洗礼を受けます。そしたらお母さんも天国に行くことができる」と言うと、その重症の息子は、「私は下に降りるのも昇ることも出来ません。又ここから大きな声を出すことも出来ません。出てもお婆さんは耳が遠いのを聞くことも出来ません。絶対会うことことが出来ません」と言いました。そこで私は言いました。「あなたはおそらく一週間位のうちに亡くなるでしょう」。あなたの罪はきれいに赦され、まっすぐ天国に行くにちがいません。あなたは洗礼を受けたから救われるにきまっています。私はあなたの

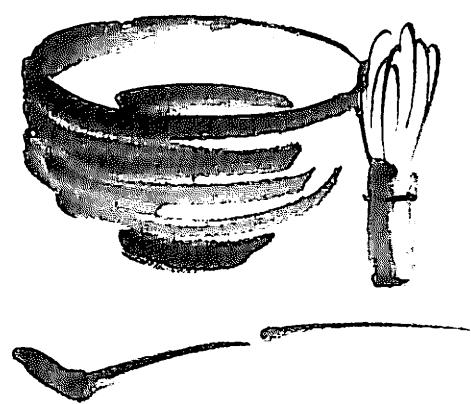
お母さんも、あなたの行かれる所に送りたいが、どうぞ風に教えたらよいかわかりません。しかし神様は全能者ですから、あなたが死んで神様のそばに行かれた時、神様にお願いいたら、きっとどうにかなると思います。是非ともお母さんの靈魂のたすかりの為に祈り下さい。今も、又死んでからも祈りつづけて下さい」と言いましたら、その方は、「必ずします」と堅く約束をしました。

それから間もなく、その方は亡くなりましたが、不思議にも亡くなられた日に、その方の向いに住んでいた求道者の婦人が、その家に行きましたとお婆さんは、「十字架のつている数珠(じゅず)がほしい」と言いました。それまでは仏教の数珠(じゅず)を持っていたのに、十字架のつている数珠(じゅず)がほしいと言つたのです。私はそれを聞いた時、「お婆さんはお婆さんが神様からお恵みをいただいて信仰したいらしい」と思いました。その婦人は、前からお婆さんと交際していたので、お婆さんに洗礼に必要な事柄を教え、そして私はお婆さんに洗礼を受けました。

お婆さんは、あまりが祈りは出来ませんでしたが、ロザリオをもつて、『マリアさま

マリアヤモウと並ればかり唱えていました。そして数珠をいつもザラクと手でまん
でいまーたから、次から次にロザリオをこわしました。そこで私も賢くなつて、紐のロ
ザリオを上げまーたら、それはお婆さんか死ぬ時までこわすにもちました。よい信
者でした。私は、この息子もお婆さんもお葬式をいたしました。

お婆さんに向ひ家の末道者は、洗礼を受けたよい信者となりましたが、その
主人は三十年間無神論者として暮らしていましたが、高野教会の近くの病院
に入院して、いた時、一人の信者から、「是非ともお見舞に行つてそのHさんを救つて
下さい」というお願ひの手紙をいたしました。私は神の園から病院に行きました
が、部屋の入口には面会謝絶と書いてありました。しかし私は一寸だけ部屋に入
ろうとノックとすると、附添の小母さんは、「入るな」と言いました。しかし私は、「病
人の奥さんの友人から特別に頼まれたので、私はどうしても部屋に入り、Hさんのそ
ばで簡単な祈りを捧げたい。話さなリで、祈りだけにて帰りたい」と言いましたら、
その婦人はやっと入ることを許してくれました。私はベットのそばで聖母マリアに祈り



を捧げ、祈りが終つてからスカブライオを、ベットの少し上の高い所に押しピンでとめ、附添の小母さんに、「絶対これとはすさまじくに、もしやわったら罰が当る」と言いましたう、その附添はその後さわらなかつたようです。そして四、五日経つてから病人は「洗礼を授かりたい」と申し込みましたので、高野教会の松田神父様が洗礼を授けて下さいました。そしてその日、病人は安らかに亡くなりました。

レオ・スタインバック 神父 略歴

- 1905年6月14日…米国アイオワ州チャリトン市に生まれる
 1931年2月1日…司祭叙階
 1931年～1937年…北朝鮮平壤に派遣
 1938年…ロスアンゼルス日本人教会に赴任
 1942年…カリフォルニア州マンザナール
 日本人収容所の司牧
 1946年…(京都)三条河原町教会
 1951年…(同)青谷教会
 1954年…(三重県)松阪教会
 1969年…(京都)宇治教会
 1970年…コリアンカトリックセンター(京都)
 1972年～89年…特別養護老人ホーム神の園
 1989年…米国に帰る
 1994年10月31日…米国、ニューヨーク
 メリール会本部で帰天(89才)



あとがき

今から十五年前のことでした。私はボランティアとして特別養護老人ホーム神の園に、週に二日、行なっておりました。スタインベック神父様は毎日、朝から夕方までみどりのスカーフラリオを造つておられました。スタインベック神父様は、毎日、朝から夕方までみどりのスカーフラリオを造つておられました。みどり色の小さい布に、マリア様と印刷した紙を貼るだけの単純な仕事で、手を動かしながら神父様は楽しそうにじ自分の小さい頃のお話をして下さいました。ドイツでビスマルクの時代にお祖父やまが、十九才のお父さま一人をつれてアメリカに入植してこられ、いろいろの苦労されたこと、だんごと家族がふえ神父様は九人兄弟の五番目に生れたこと、次から次へとお話をつき、まるでテレビの“大草原の小さい家”を彷彿とさせるような楽しいお話をしました。四、五人のボランティアの人たちも喜んで、手を動かせながら聴きました。

やがて宣教師となり朝鮮に派遣され、平壤での司牧のお話をうけて来ました時私は、“こなによいお話を聞き流しては勿体ない、書きとめておこう”と思いました。

そこで、「神父様、私はお話を書きたいと思ひますから、もう少しゆっくりお話を下さりませんか」と申しましたら、神父様は少し速度をおとてお話を下さいました。私は、一言一句魂うずき書きました。お話を三ヶ月ぐらり続りましたと思ひますが、ある日神父様は「もうこれで終りました」とおっしゃいました。それ以後は、もう二度と同じ話はされませんでした。人名もことごとく覚えておられ、その記憶力のよさに驚きました。きっと聖靈が神父様に話すことをおこなせられたのではないかと思ひました。

私は、えなよいお話を私達四・五人だけが聴いたのでは残念だ、京都教区の宣教史にとつても貴重な資料だから本にしたうまいと思つたので、「神父様、えなよいお話をもっと多くの人たちにもわかつたらいふで本にすますたら如何でしょうか?」と申一上ナガマサしたら神父様は「どうしてもかまいません」とおっしゃいました。

私は今迄書いていたのをもう一度全部読んで神父様に聞いていただきました。聞きた終った神父様は「はい、間違いはありません」と承認して下さいました。お話を思い出すまゝに話されたので年代はバラ／＼なので、本にするからは、大体年代順にし

た方がよいと思つたので神父様とその作業にとりかからうとーた時、神父様は「私が生きている間は本にしない方がよいと思います。死んでからだつたらかまいません」とおしゃりましたので私はそのまま今日まで保管しておりました。

このたび姉の発意により出版することになりましたことをうれしく思います。

神父様は、「私は死んでからも決して休みません。この地上に日本人が一人でもいる限り、天国から働きます」とおっしゃいました。きっと、「死からもずっと天国から日本人の救靈の為に働きつづけて下さることと思ひます。

スタンバウ神父様ほんとうにありがとうございます。

一九九五年八月十五日

聖母訪問会会員

シスタークリスチナ 郷 村 明子 記

レオ・スタインバック神父の宣教夜話 非売品

1995年10月7日

筆記者・聖母訪問会会員
シスター野 村 明 子

発行者 野 村 寿 美 子

〒603 京都市北区紫野大徳寺町10

印刷所 サンパウロ

